師範學校

國文教科書

卷二

5a
810
明41

42566
教科書文庫
4
810
51-1904
20000
81502

資料室

文部省檢定濟
明治三十七年三月二日　師範學校國語科教科書

師範學校國文教科書

吉田彌平編

卷二

東京　光風館藏版

52
810
明41

師範學校 國文教科書卷二目錄

			頁
一	奈良の一夜（口語文）	正岡子規	一
二	近郊の秋色	正岡子規	五
三	小川（新體詩）	佐佐木信綱	十一
〇	謬		十二
四	一燈錢の申し合はせ（書翰文）	久阪玄瑞	十六
〇	臺灣日記	石黑忠悳	十九
五	運動會	嘉納治五郎	二十五

広島大学 教 81502 図書

六　人の問に答ふ　尾崎行雄　三十二
○　航海術の練習　勝安芳　三十六
七　亞米利加行その一（口語文）　福澤諭吉　三十九
八　亞米利加行その二（口語文）　福澤諭吉　四十九
○　我が家の富　德富健次郎　五十七
九　四季（今樣歌）　清水濱臣　五十九
十　わが幼時　新井白石　六十二
十一　蒲生君平その一　瀧澤馬琴　六十八
十二　蒲生君平その二　瀧澤馬琴　七十三
十三　蒲生君平その三　瀧澤馬琴　八十二
十四　蒲生君平その四　瀧澤馬琴　八十七
○　小澤蘆庵　橘泰　九十二
十五　莫愁宮　建部遯吾　九十四
十六　獨逸國民の教育　日高眞實　百二
○　尙武　南摩綱紀　百十
十七　寒稽古　中川霞城　百二十
十八　蘇武（新體詩）　坪內雄藏　百三十一
○　ベンニーとブラサム　百三十七
十九　無名の仁者　細川潤次郎　百四十五
二十　越路の春雪　橘南谿　百四十八

二十一　盲唖學校（口語文）　坪内雄藏　百六十
二十二　公子の躾方を申し遣はす文（書翰文）　徳川齊昭　百六十七
○　白警　徳川齊昭　百七十二

師範學校　國文教科書卷二目錄終

師範學校

國文教科書卷二

一　奈良の一夜

正岡子規

明治二十八年、神戸の病院を出て、須磨や故郷とぶらついた末に、東京へ歸らうとして大阪まで來たのは、十月の末であったと思ふ。其の時は腰の病のおこり始めた時で、少し、歩くのに困難を感じたが、奈良へ遊ばうと思って病を推して出掛けて行った。三日ほど奈良に滯留の間は、幸に病氣も強くならなかっ

たので、十分面白く見る事が出來た。

時は丁度柿が盛になってゐる時で、奈良にも奈良近邊の村にも柿の林が見えて、何とも言へない趣であった。柿などといふものは、從來詩人にも歌よみにも見離されてゐるもので、殊に奈良に柿を配合するといふ樣な事は、思ひも寄らなかった事である。余は此の新しい配合を見つけ出して非常に嬉しかった。

或夜夕飯も過ぎて後、宿屋の下女に「まだ御所柿は食へまいか」といふと「もうあります」といふ。余は國を

出てから十年の間、御所柿を食った事がないので、非常に戀ひしかったから、早速「澤山持って來い」と命じた。やがて、下女は直徑一尺五寸もありさうな錦手の大丼鉢に、山の如く柿を盛って來た。流石柿好きの余も驚いた。それから、下女は余の爲に庖丁を取って柿をむいてくれる。やがて柿はむけた。余はそれを食ってゐると、彼れは更に他の柿をむいてゐる。柿も旨い、場所もよい。余はうっとりとしてゐると、ぼうんと鈎鐘の音が一つ聞こえた。彼れは「おや、初夜が鳴る」といって、尙柿をむきつづけてゐる。

余には、此の初夜といふのが非常に珍しく面白かったのである。「あれはどこの鐘か」と聞くと「東大寺の大釣鐘が初夜を打つのである」といふ。「東大寺が此の頭の上にあるか」と尋ねると「すぐ其處です」といふ。余が不思議さうにしてゐたので、女は室の外の板の間に出て、其處の中障子を明けて見せた。

なるほど、東大寺は自分の頭の上に當たってある位である。何日の月であったか、そこらの荒れたる木立の上を淋しさうに照らしてゐる。下女は更にむかうを指さして「大佛のお堂の後ろのあそこの處へ、夜は鹿が來て鳴きますから、よく聞こえます」といふ事であった。ほととぎす

二　近郊の秋色

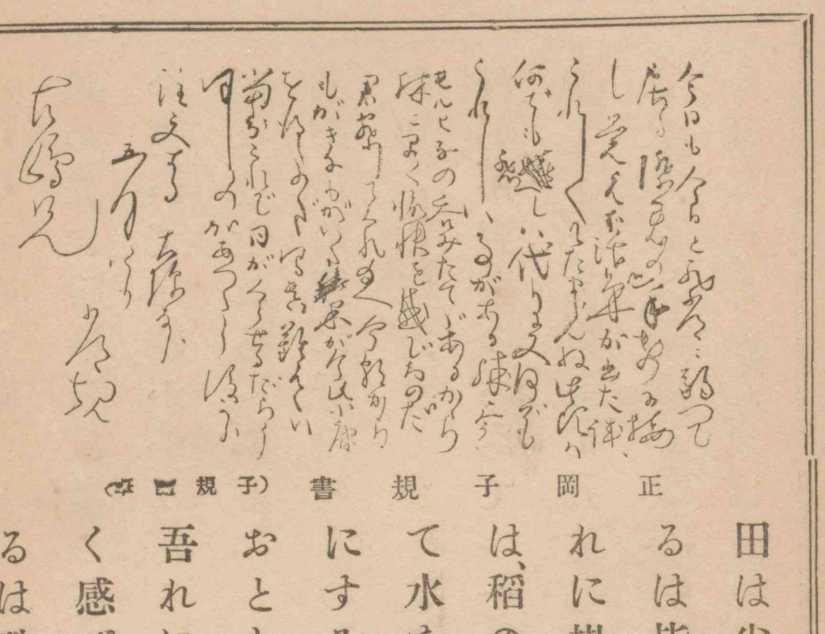
正岡子規

朝日障子にあたりて、蜻蛉の影あたたかなり。世の人は上野、淺草、團子坂とうかるめり。われも出でなんや、出てなん。病のつのらばつのれ、待たばとて出でらるる日の來るにもあらばこそ。「車呼びてこよ」といふ。やがて歸りて「車は皆出てはらひたり。遠くに雇はんや」といふ。「さまでは。今日の日和には、

足ある人ぞまづ車にて出でたる」と笑ふ。

一時過ぎて車は來つ。車夫に負はれて乘る。成るべく靜かに挽かせて鶯横町を出づるに、垣に咲ける紫の小さき花の名も知らぬが、まづ目につく。

空忽ち開く。村村の木立遠近につらなりて、右には千住の煙突四つ五つ黑き煙をみなぎらし、左は谷中、飛鳥の岡つづきに天王寺の塔聳えたり。見渡すかぎり眉墨ほどの山もなければ、平地の眺の廣き、我が國にてはこれほどの處、外にはあらじと覺ゆ。胸開き、氣伸ぶ。



正岡子規書（子規畫）

田は半ば刈らずあり。刈りたるは皆田の緣に竹を組みてそれに掛けたり。我が故郷にては、稻の實のる頃は田の面乾きて水なければ、刈穗は悉く地干にするなり。この邊の百姓はおとし水の味を知らざるべし。吾れにはこの掛稻がいと珍しく感ぜらる。榛の木にかけたるは殊に趣あり。その上より

森の梢、塔の九輪など見えたる、更に面白し。

道の邊に咲けるは蓼の花ぞ最も多き。その紅の色の老いてはげかかりたる中に、ところどころ野菊の咲きまじれる樣、ふるひつくばかりうれし。

我が車の響に野川の水のちらちらと動くは、目高の群の驚きて逃ぐるなり、あないとほし。目高を見るはわが野遊のめあての一つなるを、なべての人は目高ありとも知らで過ぐめり。世に愛でられぬを思ふにつけて、いよいよいとほしさぞ優るなる。

小鮒にやあらん、すばやく逃げ隱れたる、憎し。たま

たまに蛭の浮きたるはなくもがな。

むかうより人力車來たれり。見れば、男一人乘りて前に藁づとを置きたる、その端より黄なる實の漏れて見ゆるは蜜柑か、金柑か。一足、町を離るれば、見るもの皆雅なり。

柿の樹に柿の殘りたるはあちこちにあり。一つくひたし。烏瓜の蔓に赤き實の一つだに殘りたるを見ず。

目高多き小川を過ぐ。

童二人、とある門の内より「人力、人力」とわめく。

わざと新しき道を右に取りて川ぞひに行く。むかうより來たる女の童の十ばかりなるが、手拭を被り、左手には竹にて編みたる大きなる物を持ち、右手には小桶に鮒を入れたるを持ちたり。眼白く涼しく、頬ふくやかに、口しまりていとけだかきさまは、世の常の鄙育ちの兒とも見えず。殊にそのさかしさへ眼の色にあらはれて、なつかしさ限りなし。足にして立たば、彼の童の後につきて、ひねもす魚捕るわざの伽にもなりなんと思ふ。せめては名だに聞かまほし。かよちゃんとは呼ばずや。

諏訪神社の茶店に腰を休む。日傾き、風俄かに寒くなりたれば、興盡きて歸る。

三　小川

佐佐木信綱

廣きそらをも　うかべつつ、
遊ぶ子らをも　うつしつつ、
さびしき村の　片すみを
名もなき小川　流れゆく。
流はいとも　細けれど、
道のまにまに　逆らはず

しだしき波の　打ちつれて、
語らひながら　歩みゆく。」
すみれ花咲く　春ごとに、
かはづつまよぶ　秋ごとに、
影みる子らは　かはれども、
かはらぬ流　しづかなり。」少年歌話

○諺

麻につるる蓬。麻の中の蓬は手を添へずして真直に成る。
急がばまはれ。
瓜のつるに茄子はならぬ。

縁の下の力持。
落武者すすきの穂におづ。
壁に耳。
聞いて極樂、見て地獄。
口は禍の門。
けふは人の上、あすはわが身の上。
故郷忘じがたし。
猿も木より落つ。
鹿を逐ふ獵師は山を見ず。
相撲は立つ方。
栴檀は二葉より香し。
袖ふりあふも他生の縁。
たでくふ虫もすきずき。

長者の萬燈より貧女の一燈。

月に村雲、花に風。

てんたう人を殺さず。

燈臺もとくらし。

難波の蘆は伊勢の濱荻。

人間萬事塞翁が馬。

盗人に追錢。

寢耳に水。

能ある鷹は爪をかくす。

坊主が憎ければ、袈裟まで憎し。

人は一代、名は末代。

河豚は食ひたし、命は惜しし。

下手の長談義高座の妨。

佛の顔も三度まで。

蒔かぬ種は生えぬ。

身はならはし。

六日の菖蒲。

盲、蛇におぢず。

餅は餅屋。

柳の枝に雪折れなし。

油斷大敵。

嫁が姑になる。

落花枝にかへらず。

良藥口に苦し。

瑠璃も玻璃も照らせばわかる。

櫨木で腹切る。

論語讀の論語知らず。
わが身をつんで人のいたさを知れ。
井の中の蛙、大海を知らず。
繪そらごと。

をかめ八目。

四　一燈錢の申し合はせ

久阪玄瑞

此の度同社中申し合はせ、自分自分の力を盡くし骨を折りて、瑣細の事ながらも相儲け置きたき事に候。非常の變、不意の急に差し懸かり候うても、嚢中拂底にては、差し閊ふるものに候。追ひ追ひ、有志の人の

牢獄に繫がれ、又は飢渴に迫り候ものも相助けたく、義士節婦の碑を立て墓を築く等にも力を盡くし、手を延ばしたき事に候へども、同社中有餘の金もあるまじき事に候へば、何れ此の方の至誠をのみ貫きたき事に候。されば毎月寫本なりともして、僅かの儲致し置きたく、月末松下塾まで銘銘持ち寄り致すべく候。半年にもせよ、一年にもせよ、塵もつもれば山となる理にて、きっと他日の用に相立つべく考へられ候。同社中、身の膏を搾り出して集むる事なれば、迂濶に費やすべきにあらず、已むを得ざることあら

ば、同社中申し合はせの上にて、取り揃へ申すべく候。

抑、人を救ふも、用に備ふるも、富貴長者の事ならば如何様にも相計らふべけれど、我れ我れにては、かくまでにするは、貧者の一燈とも申すべき事に候。至誠の貫かぬ理はよもあるまじきなり。之れに依って、此の度取りたて候金を一燈錢とは名づくるなり。

一、毎月寫本六十枚づつ、村塾まで必ず持ち寄り致し置き候事。

一、寫本料は先師の定むる所、眞字十行二十字五文、片假名同斷四文の事。

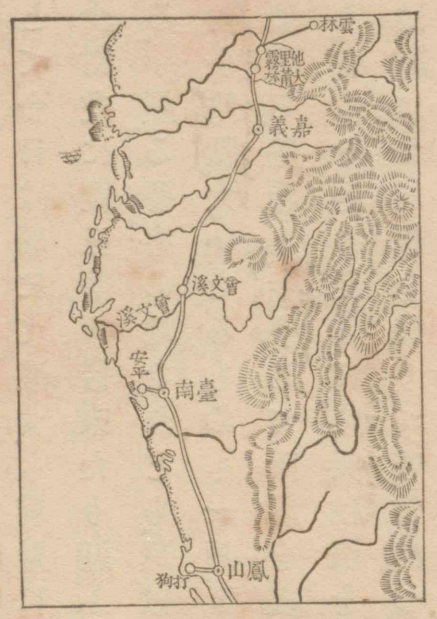
一、一日僅かに二枚づつの事なれば、さまで勉強のならぬ事はあるまじ。若しこの枚數不足ある時は、一枚の代を以って相償ひ、必ず持ち寄り之れあるべき事。

右の條條、此の度申し合はせ候處、これしきの事に骨を惜しみ候位にては、我れ我れの至誠貫き候事も覺束なく候樣相考へられ候。銘銘、きっと怠らぬ樣致したき事は申すもおろかに候。以上。

○　臺灣日記

石黑忠悳

十一月二日、朝、守備隊長來たり「この地土匪潛伏の虞あり、警戒せられよ」といふ。午前七時、この地の諸氏に別を告げて發す。原野田圃を過ぎ行くこと二里、他里霧にて小憩す。この地のある富豪、昨夜土匪のために襲はれたりとのことなれば、その家に行きて聞くに「土匪十餘人來たりて、戸外より『金を出だせ』といふ、固く戸を鎖して應ぜざりしかば、はては屋上に登りて屋瓦を破り、石炭油に火を點じて寢室の上に灌ぐなど、危險いふべからず。やむを得ず金若干を與へて、漸く去らしめたり」とて涙を拂ひつつ語れり。土匪の富豪を襲ふもの大概この類なり。金なければ主人又は愛兒等を奪ひ去る。その去るに臨みて「金何百兩を幾日までに何處に携へ來たれ。期を誤らば殺さんのみ」といひ殘すを例とすといふ。ここを發し、十一時、大莆林を經て午後四時、嘉義に達す。



野田氏と共に樓上に發車の報をまつ。時に岡少佐來たりていふやう「夜來、西門南門の外に遙かに銃聲二百發ばかりを聞く。守備隊より偵察を出だしし、未だ歸らず。更に憲兵を出だしやりたれども、それもかへらず。やむをえず發車時刻を延ばしたり」といふ。をりしもまた二三の銃聲を聞く。暫くして雞聲曉を報ずれども、偵察は歸り來たらず。四時半、岡少佐と謀り「たとひいささかの賊ありとも、護衛あらば何かあらん」とて、城門外の

輕便鐵道停車場より發す。

十二時、曾文溪に達す。　溪流、幅凡そ三十米突、水瀏りて深し。工兵架するところの假橋は往日の出水のために落ちたりとて、今日は船にて渡す。　前岸に達するや、守備隊長伊集院少尉並に岡三等軍醫來たり迎ふ。　導かれて曾文溪村に到る。　頗る要害の地なれども、戸數僅に二十餘戸。　屋宇みな狹小矮陋、大いなるものも一戸五六名ならでは入りがたく、壁落ち屋漏り、辛うじて雨露を凌ぐのみ。　本日は天長節なり、各舍を巡り見るに、屯兵は紙を赤く染めて櫻花を造り、又は紙にて旭旗を造りて靑竹につけ、戸外の庭上に建てて、以つて祝意を表するなど、忠君の情、感ずるにあまりあり。

午後一時三十分、又輕便鐵道にてこの地を發す。　七時、臺南なる宿舍、憲兵本部に著す。

十一月四日、旅團司令部に到り、まづ第一に去年十月北白川宮殿下の御病臥あそばされたりし寢室に案內せられんことを乞ふ。　比志島旅團長自ら導く。　司令部の左方の一室にしめ繩をはり、北白川宮殿下御寢所と記せり。　錠を開きて入れば、方二間の室二間あり。　その奥の間に古き御寢臺あり、殿下が御危篤まで臥させられしものなり。　その次の間に竹製の急造擔架一個あり。　これぞ御病中、嘉義地方より進ませ給ふ途次召されたりしものなる。　殿下は擔架中に毛布をかづかせられて臥したまひながら、九十度九十五度の暑さに細き村道を進ませられ、戰況を聞こし召し、それぞれ御指揮あそばされつつ進ませられしよしなど木村軍醫監の話に聞きしが、今そのことを思ひ出でてこを拜するに、涙落ち來てとどまらず、ただ無言にて退きぬ。

十一月七日、早起旅裝を整へ、午前六時、輕便鐵道に乘じて鳳山に向かひて發す。この鐵道もわが軍にて敷設せしものなり。八時、鳳山に達す。恰かも好し、ここに居る第七第九兩中隊は今朝土匪討伐のために出發せんとするところなり。余はしばし舍外の空地に立ちてそれを見送りたり。この兵隊は半ばは去年渡臺したるものにて、半ばは近く交代して來たれるものなり。昨年來、留まれるものはいづれも炎熱とマラリヤとのために、顏色青黑く、肉落ち骨出でたり。余は一見して、わが同胞が新領地を保護するにかくまで辛苦するかとそぞろに哀れなしく、この實況を內地の人にも見せまほしくおぼえたり。

この際最も心に感じたるは兵士の食饌なり。中隊長の言に「今日は特に食饌を盛んにして出陣を祝ひたり」といふ。それを檢すれば、飯の外に牛肉、芋の煮付一種、魚、野菜の煮付一種、ジャポン一切れ、香の物四切れなり。即ち通常の午飯に比すれば、ただ煮魚一種とジャポン一切れとを增加せしのみなり。土匪討伐に赴くや、いつも負傷者なきはなく、又いつも酷厲なるマラリヤに侵されざるはなし。この行、その禍は誰れも誰れも期するところ、而してその出陣を祝する食饌はかくの如し。この日記を讀まん人は誰れか一滴の涙をそそがざらん。臺灣日記

五　運動會

嘉納治五郎

運動會の目的は、一には平素、學業若しくは職業の爲に精神を一方に向け居る者をして、其の心を轉ぜし

め、其の氣分を快活にし、其の精神を休養せしむるにあり、一には又身體の運動によりて、其の健康を增し、其の體力を進むるにあり。又多數の者相集まりて競爭する場合の如きは、各自の天然の體力、其の練磨して得たる結果、正義公平を重んずる念、忍耐の力、工夫の力、機敏の働等を較べ見る好機會を與ふるものなり。故に運動會を行ふにあたりては、必ずこれらの目的に適合する樣に之れを行ひ、兼ねて競爭の際にも、德性を涵養せんことを勉めざるべからず。此の目的を達せんが爲には、學校の運動會に於いて

は、其の學校の生徒は其の技の巧拙にかかはらず盡く運動せざるべからず。然るに、今諸學校の運動會を見るに、此の主意に適せざるもの甚だ多し。即ち進んで競爭するものは特に運動に長ぜる一部の生徒に限り、一般の生徒は運動場に出でもせず、出でても傍觀者たるに過ぎず。其の進んで競爭をなすものは、唯其の運動を巧にせんとする考より、平素學業を勵まざるべからざる時にも運動をなし、それらの事のみに時間を費やすに至るものあり。かくの如きは平素一方にのみ專ら用ひたる精神を他に轉じ

て之れを休養する必要より起これるにあらず、恰も藝人の演藝を以って見世物とするが如し。又往往、かくの如き競爭によりて、かくの如き賞品を得たりと誇るものあり。これ、亦恰も藝人の演藝によりて顧客の報酬を得たるを喜ぶに似たり、偶以って其の心事の陋劣なるを表白する所以なり。又往往、運動會の爲に特に華麗なる裝飾をなし、或は人目を惹くべき新衣を調へ、以って觀者の目を歡ばせんとするものあり。かくの如きは亦運動會をして、一の見世物たらしむる所以にして、決して其の本旨に適せるものといふべからず。

我れらの奬勵せんとする運動會は、前に述べたるが如きものと異なり。學校の運動會に於いては、全校の生徒擧って運動する樣にせざるべからず。競爭の結果によりて賞品を與ふるは强ひて咎むるに及ばざれども、徒らに高價の賞品を得んと競ふが如きは、抑運動會の主意に戻れり。競爭の目的は平素自己の體力の强きを證するか、或は其の鍛錬の結果の顯れたるを自覺するか、或は其の機敏、忍耐、工夫等の他に優れるを證するかして、なほ將來の奮勵を圖る

に在るべし、徒らに我が技の巧妙なるを人に示して、其の賞賛を博せんとし、或は高價なる賞品を獲んが爲に競爭することあるべからず。故に、我れらは、優勝者に與ふるに賞品を以ってせんよりも、寧ろ其の平素の鍛錬を證すべき徽章、賞牌等を以ってせんことを望むなり。

又我れらは學校の運動會を以って其の學校に於ける平素の訓練の如何を示す機會に用ひんことを望む。即ち、競爭をなすもの、他人の妨害をなして己れのみ勝たんとするが如き卑劣なる考を有するものあるべからず。勝つには、必ず公平の手段によりて勝たざるべからず。又徒らに自己の力量若しくは熟練に依賴し、油斷をなして、其の實力の己れに及ばざるものに勝を制せらるることあるべからず。或は自己の力の到底他に及ばざるを自覺し、自己の能くする事をも爲さずして終はるが如き無氣力者あらしむべからず。又外來の客に對する場合等には、これに接する言語動作も亦其の宜しきに適せしめざるべからず。凡そこれらの點に於いて闕くる所あるは即ち其の學校に於ける平素の訓練の足らざ

るを證する所以にして、恥づべきことなり。

かくの如く論じ來たれば、運動會は決して一の見世物にはあらず、一方に於いては平素の心身の鍛錬如何を檢すべき一の試驗所となるなり。我れらは世の學校の運動會がかくの如き精神を以って行はれんことを切望するなり。國士

六　人の問に答ふ

尾崎行雄

記者足下。僕古今の賢哲英豪に於いて別に偏好する所なし。智あるものは勇なく、勇あるものは智なし、材器に長ずるものは德操を缺き、大節毅然たるものは雄略に乏し。要するに、皆一箇の不具人たるを免れず。故に僕、好んで古今東西人の傳記を讀むと雖も、只其の長所に就いて之れを師友とするに過ぎず、一讀爽然、景慕止む能はざる者に至っては、僕未だ其の人あるを知らず。然れども、強ひて愛好の深淺を較すれば、彼れ此れより深きものなきにあらず。不識庵謙信の如きは、僕が景慕心の傾注することや深き者なり。

彼れ不幸にして北陬に産まれ、上國の形勢に暗し。故に其の計圖未だ偏小なるを免れずと雖も、なほ天下を席卷し、宇内に號令する志なきにあらず。特に其の豪快義俠の氣質に至っては、高く戰國の諸將に傑出す。之れを古今東西に求むるに匹儔あることなし。彼れ既に義にして亦智、既に勇にして亦仁、加ふるに勤王の至情を以ってす。天若し之れに年を假さば、其の成就する所、あに「越山併得能州景」を賦するに止まらんや。

彼れ素より身命を賭して信玄と爭ふの愚なること

上杉謙信（高野山無量光院藏）

を知る。然れども、雄圖壯望あるがために其の義俠心を矯抑せず、敢進勇往、人生復他望なき者の如く然り。眞に是れ援弱抑强の天使にして、亦義俠心の凝結體なり。

其の劍を横たへて能州の月に吟ずるに至っては、豪爽闊達、人を圧して覺えず唾壺を擊破せしむ。彼れをし

て上國に生まれしめば、信長素より雄圖を逞しうする能はず、豐太閤亦陪臣を以って終はらんのみ。惜しいかな、彼れ人和を得て天時を得ず、天時を得て地利を得ず、壯圖未だ上國に伸びずして、將星既に北に落つ。是れ僕が嘆惜して措く能はざる所なり。

聊か鄙見を記して足下の推問に答ふ。古人評論

○ 航海術の練習

勝安芳

安政三年秋、傳習休暇三日を得たり。余コットル船に乘じて、遠洋に航せんとし、教師に面して其の許可を請ふ。教師云ふ「近日天候わろし、必ず颶風起こらん。君が術いまだ暴風を凌ぐに足らず、しばらく時をまつべし」と。余答へて云ふ「余、海軍從事の初、唯海上を以って死所とせり。難に當たり危を冒すも、また修業の要ならん」と。教師云ふ「君が言大いに是なり。唯求めて危險に臨むことなく、且十數里にして止めよ」と。余大いに悅び、生徒柴弘吉以下七八名、水卒六名を同伴して、帆を張りて、五島邊に向かひて發す。

時に微雨あり、風亦起こる。斜走回轉、法の如くす。たまたま南西の方、黑雲天を掩ふと見しが、須臾にして艦頭を覆ひ、暴風猛雨、狂濤を捲いて來たる。我が輩、力をきはめて、帆を收めて、甲板上にて是れを凌ぐ備をなせども、心中まづ狼狽し、水卒は指揮に反し、風濤は暴威を逞しうし、その苦心名狀すべからず。各必死を期して、横さまに肥前地方に寄らんとす。如何にせん、操縱の術拙にして船體意の如くならず、

瞬くひまに、もと來し路に吹き流されて、あはや高島の岸頭にあたりて微塵に碎破せんとす。

余諸士に令して錨を投ぜしめ、此の力を以ってしばらく勢力を寛うせんとするに、鐵鎖三十尋に及べども少しも感ぜず、終に暗礁に當たりて、衝突すること二回、舵拔けて孔を生じ、海水浸入して防ぐべからず。此の時、余大いに呼んで曰はく「不肖、教師の令を用ひず、微力を察せず、諸君をして此の危難に臨ましめ、且船を破摧す、何の顏あってふたたび生きんや」と。此の一言を聞いて、諸士水卒の勇氣凜然たり。令に應ずること、手足を動かすが如く、幸にして船暗礁を離るるを得たり。程なく風力雨勢も亦大いに減ず。遂に肥前地方に向かひて斜に走り入る。此の夜、力を合はせて、破帆を補ひ、流失せる諸材を修め、穿孔を塞ぐなど、少しも怠らず。

曉に及んで風雨全く止みて、晴日を得たり。乃ち大いに船を修覆し、終に他の助を待たずして、歸航するを得たり。

直ちに教師に面して其の顚末を告げ、且其の命を用ひざりしを謝す。教師カッテンデーキ之れを聞いて、微笑していふ「凡そ席上の傳習熟すといへども、危險に遭逢する景況、十度は十度の變あり、決して一樣ならず。何ぞ口頭の能く傳ふる所ならん。一度死生の險に逢はば、其の苦境を以って心中に自得するあらん。ここを以て變化の術も亦自然に生ずべし」と。余是れを聞いて學問と實際との區別を覺了し、深く其の教示に感服し、又萬般の事、活用の妙微に及んでは、口頭にあらざることを悟れり。斷腸之記

七　亞米利加行その一

福澤諭吉

安政六年の冬、德川政府からいよいよ亞米利加に軍艦をやると云ふことになりました。これは日本開闢以來、未曾有の事である。さてその軍艦と申しても至極小さなもので、石炭は港の出入に焚くばかり、航海中は全くの帆前船で、風を便りに運轉せねばならぬ。其の前、安政二年頃から幕府の人が長崎に行って蘭人に航海術を傳習して居たが、其の技術も餘程進歩して來た。今度日本の使節がウォシントンに行くについては、日本の軍艦でサンフランシスコまで航海と、かう云ふ事に幕議一決に及んだ。艦長は時の軍艦奉行木村攝津守、これに隨從するもの指揮官勝麟太郎以下、一行すべて九十六人、船の割にしては多勢の乘組人であった。

今度咸臨丸の航海は日本開闢以來始めての大事業で、乘組士官の面面は固より日本人ばかりで事に當たると覺悟して居た。丁度、其の頃亞米利加のキャピテン、ブルックと云ふ人が薩摩の大島沖で難船して、德川政府の保護を受けて、久しく横濱に滯留して居た。處がこの話をきいて「幸便だから之れに乘って歸國したい」と云ふ。日本の乘組員は「米國人と一

緒に乘るのはいやだ」と云ふ。それは若し其の人を連れて歸れば、却って銘銘どもが亞米利加人に連れて行って貰ったやうに思はれて、日本人の名譽にかかるから乘せないと剛情を張る。それこれで政府も餘程困った樣子だったが、到頭それを無理壓し附けにして同船させたのは、政府の長老も內實は日本士官の伎倆を覺束なく思ひ、一人でも米國の航海士が同船したらば、まさかの時に何かの便利になるだらうと云ふ老婆心であったと思はれる。

明くれば、萬延元年正月、咸臨丸はいよいよ品川沖を出帆し、浦賀の港からずっと北の方に乘り出した。海上は暴風がちで、四艘あった艀船が、大浪に二艘取られて仕舞った。私は一體、艦長木村の家來として乘組んだので、或日朝起きていつもの通り、艦長のために用を辨じませうと思って艦の部屋に行った。處が、其の部屋に弗が何百枚か何千枚か知れぬ程散亂して居る。どうしたのかと思ふと、前夜の大嵐で、袋に入れて押入の中に積み上げてあった弗が、定めし錠も卸してあったに違ひないが、劇しい船の動搖で戸を押し破って、外に散亂したものと見える。「是

れは大變な事だ」と思って、直に引っ返して舳の方に居る公用方の人に其の次第を告げ、ともどもに其の弗を拾ひ集めて袋に入れて、元の通り戸棚に入れたことがある。　當時は外國爲替と云ふことに就いてちょっとも考がない。　旅をすれば金がいる、金がいれば金を持って行くと云ふ極簡單な考で、何萬弗だか知れない弗を袋などに入れて、艦長の部屋に藏めて置いた。　其の金が嵐のために溢れ出たと云ふやうな奇談を生じたのである。　これでも大抵四十年前の事情が分かりませう。　今ならば一向わけはない、爲替でちょっと送って遣れば、何も正金を船に積んで行く必要はないが、商賣思想のない昔の武家は大抵こんなものであった。

しかしこの航海に就いては、大いに日本のために誇るべきことがある。　と云ふのは、抑日本の人が始めて蒸氣船といふものを見たのは嘉永六年、航海を學び始めたのは安政二年の事で、その業成って外國に船を乘り出さうと云ふことを決したのが安政六年の冬、即ち目に蒸氣船を見てから足掛け七年目、航海術の傳習を始めてから五年目である。　それでいよ

いよ出帆しようと云ふ其の時、少しも他人の手をからずに出掛けて行かうと決斷した其の勇氣と云ひ、其の伎倆と云ひ、是れだけは日本國の名譽として世界に誇るに足るべき事實だらうと思ふ。　前にも申した通り、航海中は一切外國人の助力は借らないと云ふので、測量するにも日本人自身で測量する、亞米利加の人も亦自分で測量して居る、互に測量したものをあとで見合はせるだけの話で、亞米利加人に助けて貰ふと云ふことはちょっとでもなかった。

品川を出帆してから三十七日めに、海上恙なくサンフランシスコに着いた。　着くやいなや、土地の重立った人は船まで來て祝意を表する。　陸上の見物人は黑山の如しだ。　さて陸から祝砲を打つと云ふことになった。　あっちから打てば、こっちからも應砲せねばならぬ。　此の事に就いて一奇談がある。　勝麟太郎と云ふ人は指揮官であったが、至極船に弱い人で、航海中は病人同樣、自分の部屋より外に出ることは出來なかったが、着港になれば、指揮官の職として萬端差圖する中に、彼の祝砲の事がおこった。　處で、勝の說に「それは迚も出來る事でない。　なまじひ

に應砲などしてやり損ふよりも、こっちは打たぬ方がよい」と云ふ。　さうすると、運用方の佐佐倉桐太郎は「いや打てないことはない。　おれが打って見せる」。「馬鹿を云へ、貴樣たちに出來たらおれの首をやる」と冷やかされて、佐佐倉はいよいよ承知しない「何でも應砲して見せる」と云ふので、それから水夫どもを差圖して、大砲の掃除、火藥の用意をして砂時計でもって時を計り、物の見事に應砲が出來た。　さあ佐佐倉が威張り出した。「首尾よく出來たから、勝の首はおれの物だ。　しかし當分用も多いから、暫くあの首を當人に預けて置く」と云って、大いに船中を笑はした事がある。　ともかくも、まあ祝砲だけは立派に出來た。福翁自傳

八　亞米利加行その二

福澤諭吉

さて上陸して見ると、あっちの人の歡迎と云ふものは、それはそれは實に至れり盡くせり、此の上の仕樣がないと云ふ程の歡迎。　なるほど亞米利加人の身になって見れば、亞米利加人が日本に來て始めて國を開いたと云ふ其の日本人が、ペルリの日本行より

八年目に自分の國に航海して來たわけであるから、丁度自分の學校から出た生徒が實業に就いて自分と同じ事をすると同樣、おれが其の端緒を開いてやったのだと云はん計の心持であったに違ひない。」

サンフランシスコの近傍のメールアイランドと云ふ處の海軍港附屬の官舍を咸臨丸一行の止宿所に貸してくれ、船は航海中大分損所が出來たからとて、船渠に入れて修覆をしてくれる。逗留中は勿論あっちで賄も何もそっくりしてくれる筈であるが、水夫を始め日本人が洋食に慣れない、やはり日本の飯

でなければ食べないと云ふので、自分賄と云ふわけにした。處が、亞米利加の人はかねて日本人の魚類を好むと云ふことを能く知って居るので、毎日毎日魚を持って來てくれたり、或は日本人は風呂に這入ることが好きだと云ふので、毎日風呂を立ててくれると云ふやうなわけ。

一體、メールアイランドと云ふ處は町でないものだから、をりふし今日はサンフランシスコに來いと云って招く。それから船に乘って行くと、ホテルに案内して饗應される。處がこっちは一切萬事不慣れ

で、例へば馬車を見ても始めてだから實に驚いた、其處に車があって馬が附いて居れば乘物だと云ふことは分かりさうなものだが、一見したばかりではちよっと考がつかぬ。處で、戸を開けて這入ると、馬が駈け出す。「なるほど、是れは馬の挽く車だな」と、始めて發明するやうなわけであった。

何れも日本人は大小をさして、穿物は麻裏草履を穿いて居る。それで、ホテルに案内されて行って見ると、絨毯が敷き詰めてある。其の絨毯はどんな物かと云ふと、まづ日本で云へば、餘程の贅澤者が一寸四方いくらと云ふ大、金を出して買って、紙入にするとか莨入にするとか云ふやうなそんな珍しい品物を、十疊も二十疊もある廣い室一面に敷き詰めてあって、其の上を靴で歩くとは、さてさて途方もない事だと實に驚いた。けれども、亞米利加人が往來を歩いた靴のままでさっさとあがるから、こっちも麻裏草履で其の上に上がった。

上がると、いきなり酒が出る。徳利の口を明けると、恐ろしい音がした。變な事だと思ったのはシャンパンであった。其のコップの中に何だか浮いて居

るが分からない、三四月の暖氣の時節に氷があらうとは思ひも寄らぬ話で。　さて、いよいよ其の酒を飲む段になる、列座の日本人の中には、まづコップに浮いて居るものを口の中に入れて、膽を潰して吐き出す者もあれば、口から出さずにがりがり嚙む者もあると云ふやうなわけで、漸く氷が這入って居ると云ふことが分かった。

そこで、又煙草を一服と思つた所で煙草盆がない、灰吹がないから、そのとき私はストーブの火でちょいとつけた。　マッチも出て居たらうけれども、マッチ

も何も知りはせぬから、ストーブで吸ひ付けた。　處がどうも灰吹がないので、吸殼の棄てどころがない。それから懷中の紙を出して、其の紙の中に吸殼を吹き出して、念を入れて揉んで揉んで火の氣のないやうに捩ぢ付けて、袂に入れておいた。　暫くして又一服やらうとする其の時に、袂から煙が出て居る。　何ぞ圖らん、能く消したと思った其の吸殼の火が紙に移って煙が出て來たとは、大いに膽を潰した。

すべてこんな事ばかりで、私は嫁入をしたことはないが、花嫁が勝手の分からぬ家に住み込んで、見ず知

らずの人に取り卷かれてちやほや云はれる、笑ふ者もあれば雜談を云ふ者もある、其の中でお嫁さんばかり、獨り靜かにしてお行儀を繕ひ、人に笑はれぬやうにしようとして、却つてまごついて顏を赤くする其の苦しさはこんなものであらうと、凡そ推察が出來ました。日本を出るまでは天下獨歩、眼中人なし、こはい者なしと威張つて居た磊落書生も、始めて亞米利加に來て、花嫁のやうに小さくなつてしまつたのは、われながらをかしい事であつた。福翁自傳

我が家の富

徳富健次郎

家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰れか云ふ、狹くして且陋なりと。家陋なりと雖も膝を容る可く、庭狹しと雖も仰いで碧空を望む可く、歩して永遠を思ふに足る。

神の月日は此處にも照れば、四季も來たり、風雨雪霰かはるがはる到りて、興淺からず。蝶兒來たりて舞ひ、蟬來たりて鳴き、小鳥來たりて遊び、秋蛩また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るるを覺ゆるなり。

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて樹に滿つ。風ある日には、青青と霞める空より、白き花ちらちらと舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。隣家に花樹多し。風に從ひて、飛花吾が庭に落つ。紅雨霏霏、白雪紛紛、見るがうちに滿庭花の衣を着く。仔細に見れば、桃の花あり。

櫻の花あり、椿の花瓣あり、山吹の花あり、李の花あり。庭隅に一株の山梔あり。五月闇欝陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、此の花の吾が家に開くは宜なりけり。

老李の背後に、一株の碧梧あり。その幹亭亭として些の邪なく、吾が如く直かれと敎ふるに似たり。これと手水鉢の側なる金剛纂とは葉廣うして吾が家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾滾と地に落つる頃は、與へて喜ぶ男の子一人欲しと思ふ心も起こりぬ。

つくつくぼふしの聲に、世はいつしか秋に入りて、茶山花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃え出で、ただ一株、前の家主の植ゑ殘したる黃菊も咲き出づ。名苑の花美しと云ふとも、秋のあはれ閑寂の趣は却って吾が庭の一枝にあるべし。蛻

巖の翁なりせば「獨憐細菊近荆扉」とや吟ぜん。恥づらくは「海内文章落布衣」と唱す可き身にあらざることを。

屋後に一株の銀杏あり、秋深くして滿樹金よりも黃なり。凩の風起これば、其の葉翩翩として翻り落つ。半夜夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も庇も手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と人は云ふなる錦を、吾れは庭に敷きつめぬ。

木の葉落ち盡くしては流石に淋しげなるも、日影月影いよいよ多くなりて、空を見、星を見るに、障り少きは嬉し。自然と人生

九　四季

清水濱臣

春

春もなかばは　すぎの戸を
おしあけ方に　ながむれば、
軒ばの雲は　さくらにて、
そぼふる雨こそ　香ににほへ。

夏

雲間の月も　やどるなり、
水鶏の聲も　しきるなり。
橘かをる　ゆふ風に
岩もる清水　すずしくて。

秋

秋吹く風の　芭蕉葉に
二聲三聲　おとづれて、
窓より西に　月かげの
かたぶく見るこそ　あはれなれ。

冬

冬ごもりせる　雪の夜に、
ねやの埋火　かきおこし、
炭やく賤が　なりはひを
思へばいとこそ　身はひゆれ。今樣集

十　わが幼時

新井白石

わが六歳の夏の頃、上松といひし人のすこし文字などありしが、七言絶句の詩一首をしへて其の意を解き聞かせしに、やがて誦をなしければ、三首まで教へられしをば、人にも講じ聞かせたりき。

「此の兒文才あり。いかにも師をえらびて、學ばしめらるべし」など、彼の人もいひしかど、かたくなる昔人たちのいひしは「昔よりいひ傳へしことあり『利根、氣根、黃金の三こんなくしては、學匠にはなりがたし』といふなり。此の兒、利根こそ生まれつきたらめ、なほいとけなくしてその氣根の事もはかりがたく、家富めりとも見えねば黃金の事心得られず」などいひあひき。我が父も「戸部の御いつくしみによりて、常にかたはらを離れまゐらせず、學に入れ師に從はしめん事もかなふべからず。されど、いとけなきより物書く事をば、戸部も人人に語り誇らせ給ひしことな

新井白石（藏者未詳）

れば、せめて物をば書き習はしめたくこそ侍れ」とて、我が八歳の秋、戸部の上總國にゆき給ひしあとにて、手習ふことを教へしめらる。

其の冬の十二月なかば、戸部歸り參りしかば、常に傍にさぶらふ事もとのごとし。あけの年の秋、また國にゆき給ひしあとにて課をたてられて、日のうちには行草の字三千、夜に入りて一千字を限りて書き出だすべしと命ぜられたり。冬に至りぬれば日短くなりて、課はまだみたざるに日暮れんとする事たびたびにて、西向なる竹縁のある上に机をもち出でて

書き終へぬる事もありき。　また夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へ難ければ、我れに附けられしものとひそかにはかりて、水二桶づつかの竹縁に汲みおかせて、いたくねぶりの催しぬれば、衣ぬぎすてて、まづ一桶の水をかぶりて、衣うちきて習ふに、初めはひややかなるに目さむるここちすれど、しばし程經ぬれば、身暖かになりてまたまた眠くなりぬれば、又水をかぶる事さきの事の如くす。　二たび水をかぶりぬるほどには、大やうは課をもみてたりき。　これ我が九歳の秋冬の間の事なり。

かかりし程に、この頃よりは、我が父の人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたり。十一歳の秋、また課を立てられて庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日のうちに淨寫してまゐらすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へしかば、册になして戸部に見せまゐらす。ほめ給ふこと大かたならず。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふ程の文ども、大かたは我れに命ぜられき。

又十一歳の時に、我が父の友に關といひし人の子どもは太刀打のわざにすぐれて人にをしふる事ありしを、我れにも此のわざをしへられんことを望みしに「わぬしいまだいとけなし。これらのわざ學ばん事なほ早し」といふ。「さこそ待るべけれど、太刀つかふことすこしも心得ざらんには、刀、脇差、腰にせん事誠に不用の事にや」といひしかば、「のたまふ所誠に然なり」とて、一つのわざを傳へて習はしめたり。かかりしほどに、其の年十六になりし者の、我れと藝を試みんといひしかば、木刀をとりて、三たびあひて三たびまで勝つ事を得たりしにぞ人人もまた興に入ってわらひける。

十一　蒲生君平その一

瀧澤馬琴

人の心はかくれ沼の定かには目に見えぬものから、其の善きも終にあらはれ、其の惡しきも終に顯る。善きも、惡きも、おしなべて、亡き後にこそ定かなれ。されば其の善き人の、祿もなく位もあらで名を後の世に遺せるは、只其の人の德にあり、ばた學の力によらぬはなし。　茲に又其の人あり。　吾が友修靜庵のあるじ卽ち是れなり。

抑修靜庵はもと福田氏、後に其の先祖の氏鄕朝臣の族より出でたりと聞くに及びて、氏を蒲生に改めけ

り。　名は秀實、一名は夷吾、字は君平、修靜は其の號、下野宇都宮の人なりけり。　明和四年丁亥某の月日に生まれぬる故を以って、其の父これに名を命じて伊三郎といふ。　亥の和訓は卽ちゐなり、ゐいの假名たがへども、なほ亥の意なるべし。　其の家、半農半商にて油を鬻ぎたり。　父歿して兄、家を嗣ぎぬ。　只修靜のみは讀書を嗜みしかば、耕し耘る事を欲せず、又商人の業を願はず。

同じ鄕に石橋といふ先生あり、經學を修め、施與を好み、かつ其の家豐かなりければ、天明三年、淺間山燒け

て關東いたく飢ゑたる時、倉廩をうち開き、四百苞の米を散じて、鄉黨鄰里を賑はしけり。只此の施行のみならず、或は路を造り、橋をしつらひ、陰德慈善を旨としたれば、人皆德とせぬ者なく、名を遠近に知られけり。修靜はいと夙くよりこの翁の門に入りて、勤學研究を事とせり。

蒲生君平（肖像集）

かかりし程に、祖母の物語によりて祖先のいやしからぬを知り、みづから氏を改めて志いよいよ堅し。凡そ下野人の風俗は樸訥にして强く悍し。修靜は之れに加ふるに、志氣逞しく貧しきを辭せず。よしや忠義の狗となるとも、亂離の人とならじとて、頻りに奬み學びけり。然れども、章句を修めず、國史舊記を涉獵して、いかで古學を起こさんと欲する心いと切なり。剛腸かくの如しといへども、母に事へて孝なりければ、母も亦愛することを他し子よりも深かりけん。

修靜が壯りになりしころ、其の兄は身まかりけり。

これにより、母田園を半ば分かちて修靜に取らせんとしけるに、修靜いたくこれをいなみ、且母を諫めて曰はく「吾が兄不幸にしてなかぞらに身まかり給ひ、且その子は尙幼し。さるを、今多くもあらぬ田園をわが爲に分かたせ給はば、幼き者は何によりて荒年の飢寒をしのがん。凡そ兄弟叔姪の、故なく田園を分かつは親族怨を結ぶ本なり。われは一歩の田を得ずとも、ともかくもして一期をおくらん。姪は吾が母の嫡孫なり、渠れが身裕かなる時は、吾が母もまた裕かにおはせん。御慈みをいろひまつるはひとり姪の爲のみならず、卽ち母のためなれば」と泣く泣く理りを盡くししかば、母はこれを賢として、遂に其の意に任せたりきとぞ。兎園小說

十二　蒲生君平　その二

瀧澤馬琴

是れより先、寛政二年の冬琉球の使人入朝しつと聞こえしに、故ありて彼の輩と應接しつる者宇都宮に歸り來にけり。修靜一日これを訪ひて「足下はこたび球人と應對したりと傳へ聞きぬ。何らの說話かありし」と問ふに、其の人答へて「否、させる說話もなか

りき。只よもやもの話のついでに、球人吾れに問うて曰はく『皇國は誠に文あり、武あり、大かたならぬよき國なれど、竊かに心得難きことは、樣といふ字に三體ありて尊卑の差を分けらるるに、或は永ざま或は美ざま、つくばひ樣といふ由は如何なる義理のあるやらん』と云はれしには困じたりき」と、うちほほ笑みて告げにけり。

修靜これを聞きしより、憤り胸にみちて嘆息の外言葉もなく、そがまま宿所に走り歸りて、獨つらつら思ふやう「昔、南北朝の內亂より應仁の兵火に至りて天

朝の舊典皆悉く亡失し、文華は永く地を拂うて世は戰國となりし事、既に二百餘年。其の惡俗の餘毒流れて、昇平の今の世まで洗ひ淸むる者の足らねば、附庸褊小の球人にすら、今の世まで侮らるるこそ安からねね。いで吾れ古學を興こして國體を張り、天下の爲に死力を盡くして國恩に報ずべし」と愈思ひ定めつつ、指を噬み血を染めて、孝子之情有、終身喪、忠臣之心無、斃命時と大書し、志願の臍をぞ堅めける。

かかりし程に、歲月を經て修靜江戸に往來し、林家の門人になりしかば、帶刀して儒學を唱へ、當時高名の

儒者文人と交はりて遊學すること久しかりき。然れども、其の持論時勢に適はず、或は之れを迂濶とし、或は之れを狂妄として、嘲り笑はぬは稀なりしを修靜物のかずともせで、愈守りて自ら貶さず。其の友に告げて曰はく「昔は儒官明かに天朝の故實に通じ、六經を以ってこれが資としたり。今の俗儒は天朝の故實を知らず、夏夷順逆の理りに暗くして名を亂り言を紊る者、百五六十年來比比として皆是れなり。其の位に在るものは其の道を行ひ、其の位にあらざる者は其の言を行ふこと、古今一致なり。吾れ憤り

を發して志を立て、古學を興こして逸史を修め、力を經世に盡くして、もて國恩に報じまつらんと欲すること、他なし、彼の世に阿りて利を謀り、みづから名教の罪人たるを知らざる者と隣をなさじと思ふのみ。このこと同志のために語るべし、悠悠の徒と語るべからず」とぞいきまきける。

此の頃よりして修靜、九志編述の志あり。古の山陵多く荒廢して其の迹定かならぬものありと聞くこと久しきを以って、まづ山陵志より剏めんとて、獨行して京に赴き、南海を越え淡路に渡るに、素より路費

先夜ハ未上得ニ面貌ヲ一躬ニ枉餉ノ恩饗ヲ一ト雖ト時恐委他人至リ以テ用事ノ誘ヒ法ヤシ而盡ク紛テ拙方ノ書策ヲ中ス通リ　歴代帝王ノ山陵又ハ荒廃シテ所在モ明ラカ知レ不得ト問尋ネ得ル猶遂ニ此度林大學頭殿ニ中シ入ル係テ其使トシテ去月五六日ヨリ出府ヨリ遂ニ上京ス所ニ居世ニ祀有リテ方ニ尊崇第一義ニ存ル乱世以来礼法壊今沼平二百年ニ及ヒ上サヘテノ有識モ無之ニ付但シ等閑ニ放棄ス可ル候ニ幸ニ当今市尤中伊豆殿ノ大學頭殿何レモ皆一代ノ賢才ニ在ル故ニ以改教ヲ印鄭ル[illegible]の此時ニシテ其一二ノ闕ヲ補テ忠功ヲ建ント拙方多年ノ願ヒ有幸ニシテ去年父ヲ喪此度一旦忌ヲ已ニ過ル得ハ右ノ上ニ以通ニ[illegible]是ヲ江戸ニモ親友二三ノ以旗本ニ金力四五両ハ不得又佐野鹿沼ナト師友ノ間ニテ衣類臘ノ物ノ[illegible]度ヲ致数年浪

蒲生君平書

[illegible]ノ拙方漸ニ[illegible]ノ武士ニ[illegible]ハ[illegible]ハ開系分千里西遊六七十日ノ物入ニ心遣中ハ間前ニ中義ニ西ル金子拵而拝借仕度ク此義ニ中ハ[illegible]モ中ハ[illegible]金ノ負数拝未定ハ只以[illegible]知ラ下ハ間更ニ此此中ハ[illegible]昔ニ高人ニモ義ヲ好中ニ[illegible]ハ奥州ノ金貴吉次ト云ル[illegible]経ニ[illegible]山川[illegible]儀ニ方ノ大石[illegible]ニ助ニ[illegible]ニ金銭ヲ軽ミテ忠義ノ名ヲ立ル[illegible]多ク[illegible]ノ寒[illegible]拵リ[illegible]貴ニモ此推察ニ[illegible]霜金拵而時分晒ニ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]天下第一ノ義挙ニ[illegible]ニ[illegible]忠感定テ神明ニ達シ申旦貴公ハ拙方ニ於ル毋方ノ姻親家ニ千金ヲ富テ本ヨリ一郷ノ良[illegible]ノ[illegible]ハ[illegible]ハ拙方モ命ニ[illegible]ハ[illegible]モ[illegible]ニ真ニ此願ヤ十一月日

蒲生君平

（宮内省蔵）

の乏しきを憂とせず。　艱險を履み風雪を犯して、六十六國其の半ばを經歷し、あるは里老に問ひ、或は舊圖を考へ、諸陵存亡の趣を目擊して苦辛を著述の爲に辭せず。　月日は旅寐に移れども、其の志うつらずして愈精力を盡くしけり。

丁卯の年、北虜邊塞を擾すといふ風聞あり。　修靜江戸に在りてかの事を傳へ聞きて、憂へ且憤りにえ堪へず。　即ち不恤緯五編を著はし、上書してこれを國老の執事に奉りしに、御取上はなかりけり。

とかくする程に、山陵志一卷漸くに稿を脫して刻本にせまくほりするに、修靜もとより儋石の儲なければ、同志に告げて未刻以前に入金を促し、且其の友鍵屋靜齋らが資を借りて製本全く成りしかば、之れを京師に獻り、及び關東の搢紳竝びに有職の人人に參らせけり。　然るに、其の論、處士浮浪人のあげつらふべき事にしもあらず、贅言分に過ぎて忌み憚らざるに似たりとて、修靜を市の尹の廳に召して、其の條條を詰られしに、修靜すなはち律令を引き古實を證して答へ申すことの、理にかなひしかば、重ねて咎めはなかりけり。兎園小說

十三　蒲生君平その三

瀧澤馬琴

初め修靜が山陵訪求の爲に京に赴きし時、彼の地に絶えて知る人なし。當時、小澤蘆庵は古學を好みて萬葉風の詠歌に名高く、世にすねたる隱逸なりとかねて傳へ聞きしかば、かれが助を借らばやとて、其の京に入りし日に、やがて蘆庵が宿所を尋ねけり。小澤が家僕出で迎へて「いづこより」と問ふ。いひよる由もなきままに、修靜まづ佯りて「某は下野なる宇都宮のほとりにて蒲生伊三郎と呼ばるる者なり。琴を好み候へども、田舍にはよき師なし、主人の翁は琴の妙手にておはする由、東野のはてまで隱れなし。是れにより御弟子にならまくほりしてはるばると來つるにて候ふ」といふ。

其の僕、心を得て奥に赴き云云と告げにけん、蘆庵は聲を高くして「あな、無益しき問はれごとかな。汝出でてしか答へよ。主人は久しう客を辭して交を絶ちたれば、都の中だに親しうものせるは稀なり。琴は若かりし時かき鳴らしたりけるを、あちこちの人に知られて『彼れに聞かせよ、此れに教へよ』といはるるがうるさければ、近頃打ち碎きて薪に代へたり。

かかれば所望に從ふべくもあらず。他に行きて求め給へ」といふ聲の、襖一重を隔てて定かにぞ聞こえける。

修靜は僕が告ぐるに及びて、そが云云といふをしも待たず、更に又推し返して云ふ「翁の御答ここにもつばらに漏れ聞きたり。某なほ一言あり、願はくは枉げて聞き給へ。吾れは下野なる儒者なり。しかじかの志願あれば屢江戸に遊學し、こたみ都に上りしかど、相識れる者絶えてなし。翁の古學を好み給ふと其の氣質の俗ならぬとは、かねて傳へ聞くものか

ら、いひよる由のなきまに「琴を學ばん爲に來たり」とはいひしなり。こは長者を欺くに似たれども、其の虛言は已むことを得ざりし實情より出でたれば、許して對面せられば、肝膽を吐き志願を告げて、翁の助を借らんと欲す。かくても意にかなはずば、退けられんこと勿論たるべし。今一たびわどのを勞せん。此の由執り次ぎ給へ」といふ。蘆庵これを洩れ聞きて「さりとは思ひがけざりき。そは奇しき客人なり。對面せずば悔やしき事あらん。此方へと申せ」とてやがて面を合はせけり。

修靜深く歡びて、夙くより思ひ起こしし志願の由を說き示し、山陵志著述の爲に古き御陵を尋ねんとて旅寐をしつる事の趣云云と語り出づるに、蘆庵も只管感歎して「足下は得がたき學士なり。さる志ならんには、吾が庵に杖を留めて、ここらわたりの御陵をしづかに訪求したまへ」とて、又他事もなくもてなしけり。

小澤蘆庵（肖像集）

十四　蒲生君平その四

瀧澤馬琴

是れより、修靜は日毎に古陵を尋ね巡るに、ともすれば日暮れて歸るを、主人は自ら風爐を焚きて湯浴みさせぬる老人の心づかひを、胸苦しとて辭めども、從はず。「是れらの事は只管に客を愛する故のみならず、吾れも亦かかる奇人に宿する事の歡ばしく、足下の疲勞を慰めて恙なかれと思ふよしは、國の爲に力を竭くす人の力にならんとてなり。必ず辭退し給ふな」とて、後後までも然してけり。

かかりし程に、修靜はある夜、更闌けて子二つの頃歸

りしかども、蘆庵はいねず待ちて居り。例のごとく湯浴みさせ、飯をすすめて、さていふやう「吾れ足下に宿せし日より蔬菜の外に物もなく、させるもてなしをせざれども、夜は老僕を休らはせんとて、手づから風爐さへ焚くを思ひ汲み給はずや。古陵を尋ね巡ればとて、今までは要なからんに、道草くうてか。老人に物を思はせ給ふこと心得難し」と呟きけり。修静聞きて容を改め「翁の恨、理りなり。吾が非をかざるにあらねども、更闌けたるは聊か故あり、懺悔の爲に笑に供へん。けふは、それの天皇の御陵を尋ね

たりしに、日の暮るるまで尋ねもあはで、思はずも等持院なる尊氏の墓を見たり。ここに至りて、年來の恨、心頭に起こりて堪へられず、墓に向かひて罵るやう「梟臣尊氏、なほ靈あらば、今いふことをたしかに聞け。汝が一旦治まりたる建武中興の世を亂りて、逆に取り逆に守りし毒を後世に流ししより五百十數年、干戈收まらず、國の舊典も是れが爲に燒け亡び、王室も亦これに因りて卑しく、古帝世世の山陵すら迹なくなりて、吾れらにさへあくまで物を思はするは皆悉く汝が罪なり。天罰當に知るべし」とて、杖をも

て石塔を思ひの儘に打ちたたき、かくて寺門を出づる程に、物ほしうなりしかば、道のほとりの酒屋に立ちより、怒にまかせ飲むほどに六七合を盡くしたり。さて酒屋を出でしかど、醉うて足も定まらず、此のままにて歸り行かば、必ず翁に叱られん。なかば醒まして行かんと思うて、株に尻をかけしより熟睡やしけん、時移りて駭き覺むれば更闌けたり」と語る。

蘆庵は噴き出だして、思はずからからと打ち笑ひ「さても、世の中には似たる馬鹿者もあるものかな。吾れら亦往ぬる年、ある日、靈山の邊へ逍遙して長嘯子の墓をよぎりし時、流石に宿恨なきにあらねば、行きもえやらずにらまへて『長嘯子不滅の罪あり。わぬし、みづからこれを知るや。わぬしは豐太閤の外族とて位高く且采地も廣かるに、心ざま武士に似ず、伏見の籠城に敵の旗色を見て魂胎を抱き、鳥居元忠をすて殺しにせしは不義なり。事平ぎて罪を蒙り、わづかに命を助けられしを幸ひにして、恥を知らず、心にもあらぬ世捨人がほしてえせ歌多く詠じたる、一盲衆盲を引きしより、歌の調べわろくなりて今に至るまで直らぬは是れ不滅の罪にあらずや。冥罰か

くの如くならん」と罵りながら、つゑをあげて墓を毆きたる事ありけり。こは能く似たるにあらずや」と語りもあへず、聞きもあへず、齊しく腹を抱へたりとぞ。兎園小說

○ 小澤蘆庵　橘泰

小澤蘆庵は和歌道の英俊、三百年來の一人といふべき人にてありき。そのよめる歌どもの秀逸なるは山の如く、海の如し、世の人人もよく聞き知れる所なり。

天明回祿の後、太秦にかりずまひしけるが、ある夜、ぬすびとども來たりて、翁が家のやり戸をおしあけ入らんとして、うかがひけるに、翁とく知りて、腹卷を着、左の手に長刀をぬき

もち、右の手に手燭とりて、盜人どもあへて入らば、薙ぎ倒さん勢ありければ、盜人どもえ入らで、歸りぬ。そのあくる日の夜も來たりぬれど、同じさまなれば、此の後は盜人來たらずなりぬるまに、

ありそみの岩ほこごしみ、こえかねて、
芦根枯れ
よるよる毎夜
となんよみける。

翁、ある夜ふけて、門をたたくものあり。何事にかと戸をひらけば、しれる人が、錢三つ借らまほしといふなり。折しも翁がもとにあらざりければ、隣の家にて借りてやるとて、

くやしくも、なにはのあしのみつをなみ、
大坂
こと浦かけて、からしつるかも。

とよめり。いはゆる「聲に應じて成る」の妙を得たり。

かつて、黄紫陽及びおのれなど招きて、史漢左國など歴史の講會をしけり。おのれは、晉書をよみけるときに、ひたすら往きけり。國史のみならず、漢土の史にもわたりて、博學なる翁にてありしなり。ただ憾むらくは、俊英のあまり人をしのぐ氣味ありて、溫良恭謙などいふ風はなかりしなり。」

庚申の年の暮によめる歌に

いりあひの、かねてをしみし年なれど、
今はと告ぐる聲のかなしさ。

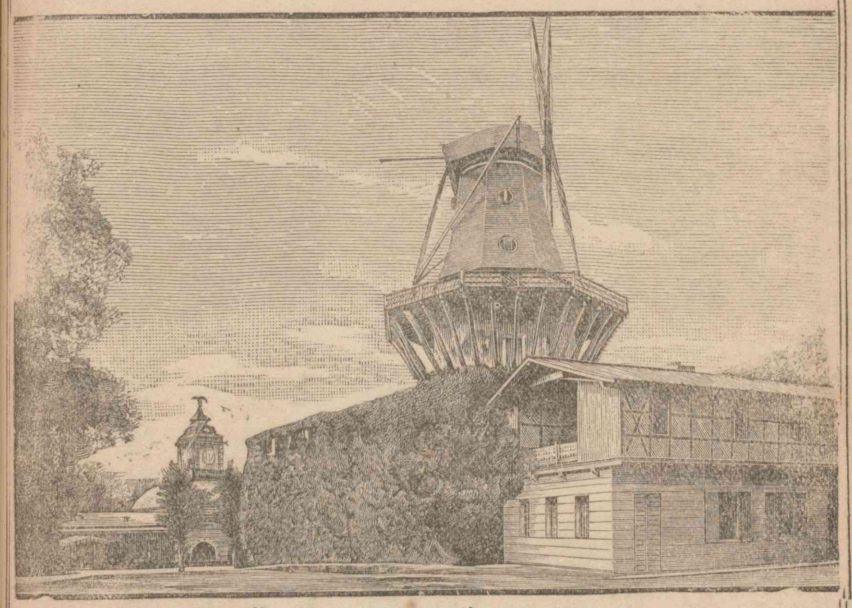
あくる年の七月に身まかりぬ。四五の句は讖にてありしやらん。「鳥の死なんとするとき、その鳴くこと哀し」といへる、最うべ。芝屋隨筆

十五　莫愁宮

建部遯吾

ポツダムは伯林の南六里に在り。巴里のベルサイユといふが如く、普魯西王家の離宮の地にして、また政治上の要地たり。町の宮、莫愁宮、新宮等の宮殿あり。また莫愁園といへるいと廣らかなる宮苑あり。宮苑はやがて公園にして、宮殿は例の木戸錢とりて、内外人を問はず縱覽せしむ。その他、山莊寺觀等なかなかにみやびたり。

町の宮の門の邊、街道の眞中に王の木といふあり。菩提樹の老木にて、昔フレデリキ大王、この樹の下にて、民の訟をなにくれとなく聽かせられたりとて、こ



サンスーシーの風車臺

の名あり。

莫愁宮の由緒こそわけてめでたかりけれ。大王、離宮を營まれたるに、宮の西南に風車臺あり、宮城よりの眺めに、いかにも目ざはりなれば、王あるじの農翁に取拂を命ぜらる。翁「この風車の、翁

が爲に唯一の財産なること、たとへば陛下の爲に普魯西の全版圖あるがごとし。今もし陛下の普魯西を奪はんとするものあらんに、甘んじてそがせんまに任せたまはんや」と憚る所もなく申しけり。王は言下に悟りて「いしくも聞こえつるかな。翁の名は何とかいふ」と仰せけるに「獨身ののんきなる性分を、里人綽名して莫愁翁（サンスーシー、佛蘭西語なり、當時佛蘭西語は一般に上品として行はれたり）と申す」と聞こえ上ぐ。「いでわが城も今より翁の名をとりて莫愁宮と名づくべし」と仰あり。これぞこの宮、

この苑の由緒なると聞こえたり。

まことや、國の將に起こらんとする、必ず禎祥あり。大王山の下に居り、積德累世以って周室を致し、新田氏孤忠を以って時利あらず、その末終に大いに起こるものを德川氏となす。普魯西今日の帝業、ウィルレム、ビスマルク、モルトケ、君相將の世にも罕なる遭遇によるとはいへ、抑亦一日のわざならめやは。フレデリキ大王の後、數十年にしてナポレオンの厄あり、普は露西亞境なるチルシットに追ひつめられ、千八百七年、ルイゼ王后の歎願にも拘らず、剛愎なる

フレデリキ大王莫愁翁問答

ナポレオンは普を要して不名譽極まれるチルシットの條約を結ばしむ。王后、婦德君德と共に高く、勤儉尚武にして民と親しみ、ホーヘンツォルレン家固有の美風を發揮して、盛德逸事いひつくしがたかるを、時

利あらず、國勢蹙まり、今は如何ともすべからず。されば、唯一の希望と光明とは偏に二王子の教育に繫るを確信して、熱心にいそしみたまひしが、天壽さへ長からで、千八百十年七月十九日、竟に永遠の眠に就かせたまひぬ、御年僅かに三十五とぞ聞こえし。

烏兎匆匆六十年、世の浮きふしの定めなく、當年十二歳の頃是なき、御母后の柩前に泣き伏したまひし第二の皇子ウィルレム、今は髪既に白く、凛凛たる威風、隱然中歐强國の君主たる天運を負うて、千八百七十年七月十九日、伯林の西郊シャーロッテンブルグの廟所、眠れるが如き御母后のやさしき大理石臥像の傍に、「こたび佛國との戰爭にこそ、在天の神靈を慰めまつらん時は來にけれ」と、首途の告辭に詣でらる。積德の注ぐ所、積威の發する所、向かふ所敵なく、メッツとなり、セダンとなり、ストラスブルグとなり、而して巴里、ベルサイユとなり、當年の屈辱全く雪ぎて、更に獨逸一統の業を成す。莫愁一基の風車臺、まことに今日を豫言するものに似たり。

かくて興亡治亂の迹などそこはかとなくおもひつづくるに、暮れがたき北地の初秋の日影いつしかに

傾きて、莫愁園の菩提樹林も人影絶えたるに、さはとして伯林への路をたどりぬ。西遊漫筆

十六　獨逸國民の教育

日高眞實

「物質上にて失ひしものは精神の力にて償はざるべからず」、これフレデリキ、ウィルレム第三世が、ナポレオン第一世に國の財を奪はれ、地を割かれて、普魯西の疲弊せる時にあたりて言ひ出だせる語にて、やや人口にも膾炙しをることなり。王はこの精神を以って普通教育を盛んにし、ベルリンには大學をも起こし、熱心に學事を勸められき。當時の政治家にはスタイン卿、フンボルト卿、アルテンスタイン卿などありて熱心に各種教育の改良上進を謀り、學者にもフィヒテ、シュライエルマッヘルなどいふ名士顯れ出でて、これまた熱心に教育を盛んにすべきことを論じ、普魯西政府よりは人をペスタロッチのもとに遣はしてその教育の說、教授の法を傳へ習はしめ、內務省を割きて別に文部省を興こし、ますます師範學校を盛んにして確乎たる基礎を定め、整頓せる課程を立て、嚴重なる教員試驗の法を設けたり。

かくて、普通教育は人民一般の間に行はれ、普通教育を受けざるものは殆どなく、千八百八十六年の統計によれば、學齡兒童にして就學せるもの百人中九十六人、その他は教場不足のため入學するを得ざるもの身體上或は精神上の發達不十分にして就學する能はざるものなどにて、まるくいへば、學齡兒童は皆就學せりといふも可なるに至れり。されば、普魯西にては、下婢などに至るまで獨逸文を讀むこと、書くこと及び數ふることは勿論、幾何學、物理學、博物學の初歩、地理、國史の大要をば諳んじ居り、その外に圖畫

紅はゆ

と女紅とを能くせり、從って、物事に見込を立つることを得、仕事をするにもわけがわかり居るなり。文學上の事にても、宗教改革以來の重なる獨逸の詩人文人の名を知らぬものはなく、名家の傑作の一つも知らぬものは、下婢にも少かるべし。

夫れ學問は利器なり。獨逸が、この千八百年代の中頃より大いに勢力を得るに至りしは、この利器の助によれることの多きはいふまでもなし。これを用ふる人そのものは恐るるに足らねど、此の利器はすなはち恐るべきなり。

我が國にてもこの利器を作らんと欲せば、教育を盛んにして、知識を廣め、德情を篤くし、體力を鍛錬するの外はなし。チルレル教授いふ「國民の教育なければ、國の富はあるべからず。又この二つのものなくては、國の力も政治上の自由もあり得べからず」と。スタイン卿は普魯西の宰相たりし時、一方には教育を盛んにせんことを務め、一方には農工商等の諸業を奬勵せり。教育なければ國の富はなかるべけれど、教育のみにては富は出で來ざるなり。國内の秩序は亂れ、官吏の間には惡しき風習行はれ、黨派心の

ために國力を弱め、外國を崇拜するがために外國に賤しめられをるなかに、ナポレオン一世の雄才大畧を以ってやにはに押し寄せ來たりしことなれば、普魯西の疲弊せるも、尤の次第といふべし。

當時見識あるものは何れも目を國民の教育に着けしこと歴史に明かなり。勝ち誇ったる佛蘭西の軍勢が、わがすみかのまはりに横行するにもかかはらず、泰然として聽衆を講堂に集めて、その愛國心を鼓舞し、佛蘭西人の跋扈を抑へて普魯西の國力、自由を恢復せざるべからずと大音に演說して聊かも畏れ

避くる所なかりしフィヒテのごときは、眞に學者の氣象を表するものといふべし。をりからフィヒテが佛蘭西人のために擒にせられ、他の地に送られたりといふ評判は、ベルリン市中に度度たちしよし、當時の有樣思ふべし。今日普魯西の强大なるものは、實にその根蔕をこの時に固めたるなり。

されど「教育を土臺にせざるべからず」といふ大原則は、平和の世にも、かはることはなかるべし。世亂れての後に、教育を盛んにせんことを說くは、已に遲し。智者は豫めす、我が國今日の政治家及び學者にも當

年のスタイン卿フィヒテ等のごとき覺悟なくて可ならんや。

普佛戰爭の後、或人ビスマルク公に向かひ、普魯西陸軍の强く、よく整ひたることを稱賛せしとき、ビスマルク公が「いな、これは全く教員諸君の御蔭なり」と答へしは、よく人の知りをる話なり。このビスマルク公が答は、本世紀のはじめにフレデリキ、ウィルレム三世のいはれし語に照應するものにして、かのスタイン卿及びフィヒテ等に對する謝辭と見なしてもよかるべし。日本教育論

尚武の說

我が大日本國は、皇祖皇宗以來武を以って國を建て給ひ、國名を細戈千足の國と稱へ、人皇第一の天皇を神武と申し奉り、爾後列聖皆武を尚び、併せて文道をも崇び給ふ。三種の神器の如きも、鏡は智に象り、璽は仁に象りて文なり、劍は武なり。且古昔は祭政一致、文武岐を分たず、其の内にも尤も武を重んじ給ひしを以って、下亦之れに化して俗を爲し、大にしては國を治め、小にしては一家一身を齊修する、皆此れに由らざるはなかりき。

降って舊幕德川氏の時に至っては、上下貴賤、武士道を以って人間最大至重のものとせり。故に幕府を始め、三百諸侯の政法、制度、皆武に基づきて之れを定め、官祿、職俸、班列等、悉く軍役兵備を本として之れを定む。故に俸祿の多寡に從って、陪臣僕從の多少、武具器械の異同あり。總べて之れを武士と稱し、甲冑弓砲槍劍の堅利、馬の肥健なるを以って無上の寶とし、互に相誇稱せり。是れを以って、人人衣食を節して、之れを蓄ふることを第一の專務とし、衣服は綿衣布袴、臂骭を露はし、僅かに體を蔽ふのみ。家屋は只風雨を避くるを以って足れりとし、敢へて美麗を事とせず。若し絹衣美袴、大袖長裾の者を見れば、遊冶郎とし、婦人の如しとし、共に齒せず、蔑視卑汚して、嘲嗤すること止まず。飲食も亦飯粗菜、極めて麁薄なりき。

諸藩の學校にても、大抵は文武兩道を兼ね敎へしなり。蓋し文武は猶車の兩輪あり、鳥の兩翼あるが如し。只文道のみを知りて武道を知らざれば、氣象柔軟、身體虛弱になり、て、活潑進取に乏しく、武道のみを知りて文道を知らざれば

氣象麗屬行爲暴悍になりて、沈着靜寧を失ふ。故に文武を兼修せざるべからざること、猶車の隻輪にては行くべからず鳥の片翼にては飛ぶこと能はざるが如く、必ず相資け相待ちて、始めて大いなる功用を成すことを得べし。故に幼年の時より、兩道に心掛け、文道を學びて智を開き才を達し、以って其の德を成し、武道を學びて膽を鍊り技に熟し、全備の人と爲ることを期せざるべからず。若し一旦國家事あるに臨みては、全國皆兵と爲りて、各自臣民の本分を盡くさざるべからず。其の時に臨みて、俄かに砲馬劍槍等の技を學ばんとするは、諺に謂はゆる盜を見て繩を索ふと同じく、到底間に合ふべからず。故に平素其の心掛を怠ることなかりき。又昔時は文武を學ぶとともに、義理廉耻の心甚だ厚かりしなり。

右に陳べたる衣食の節儉、武備、廉耻等の事につきて、余が聞見せしことを一二列記して之れを證せん。

德川家康公の節儉は皆世人の知る所なるが、余の宗家佐野鄕の宅に、公の薨ぜられし時、片身に贈られし直衣あり、純赤にして、紫の飾り絲あり、實に美品にして今猶色も甚だ褪せず。然るに、袖口は摩して殆ど破るるばかり、色も亦褪せたり。かくの如き禮服までも永く改めず用ひられしを觀るに足れり。

余又嘗て日光廟を拜せし時、東照公の平日佩帶せられし刀を見しことあり。革柄にて手澤に汚れたり。緣頭、鍔等皆鐵にて、金銀の飾は少しもなし。鍔には少しすかしぼりあり。刀室は黑蠟色なり。右の如く、外表は誠に素朴極まりたれども、中身は氷霜凛凛古今の名刀にて、人をして一見戰

栗せしむ。又戰時常に着用せられし甲冑を見る。冑は桃形淺黃色を帶びたる鐵にて、前立物等の飾もなく、甲は前後二枚の鐵を蝶合せしのみにして威絲もなく、飾もなく、極めて質素樸野なること、殆ど從僕の甲冑とも云ふべき程のものなりき。かくの如く儉德を守られし故に、三百年の基業をも開かれしなるべし。

おあん物語の中に「さて衣類なく、おれが十三の時、手作りの花染のかたびら一つあるより外はなかりし。其の一つのかたびらを、十七の年まで着たるにより、すねが出て難儀にあつた。せめてすねの隱れる程のかたびら一つほしやと思うた。此のやうに、昔は不自由な事でおぢやつた。又午飯など喰ふと云ふことは夢にもないこと。今時の若衆は衣類のもの好みに心を盡くし、金を費やし、食物は色色好み

事を召さるる沙汰の限りなり」。

瀧川一益關東管領として、甲斐橋に至りしに、諸將對面のために來たれり。一益曰はく「某只今一つある衣服を垢付きたる故に洗ひたり。赤裸に候ふ程に、暫く待ちて給はれ」と。」

余四十餘年前、諸國を歷遊せし時、因伯に至りしに、折節一藩大節儉の令ありとて、士人の語りけるは「國侯は水戸より養子に來られたる人なるが、入部の翌日、家老用人等、羽二重の衣服に麻上下を着て登城せり。侯曰はく『余は水戸の田舍に生まれて、大いに角力を好む。汝等大儀ながら、其の座にて、角力を見せよ』。因りて、水戸より從ひ來たり、常に左右を離れず侍し居る臣を顧みて『角力の相手をせよ』と云はれたり。角力する間に、侍臣豫め侯の命を受け居りしことなれば、家老等の衣服を、散散に引き裂きたり。さて角力終は

りて、侯大いに諸臣を慰勞し、且曰はく『汝等の衣服、大いに裂けたり。元來武士は、丈夫なる衣を用ふるを可とす。此の後は綿衣を用ふる、如何ん』と。ここに於いて、諸臣且懼れ且愧ぢ、上下皆綿服を用ふることになれり。侯又令を下して曰はく『凡そ予が封内に居る者は貴賤を論ぜず固く絹衣を着るを禁ず。只着るべからざるのみならず、家にも藏し置くべからず。若し家に藏し置き、盗難等に罹りて其の事發覺せば、卽日封内を退去せしむべし』と。因りて富豪の者は、絹や縮緬やの衣類を長持幾棹と云ふほど、封外の商賈に賣却せりと云ふ。尤も侯は常に綿服のみを用ひられたり。

これより遊侠奢侈の風俗頓に改まれり」と。

昔は何か肴の一種も求めらるれば、それを汁にして、近所の懇親の者を招く。其の招かれたる者は、飯を食器に入れ、膳

椀を添へて面面の宅より持ち寄り、之れを食して歡談せしなり。此會合を名けて汁講と云ふ。今時の振舞と同じ。かくの如く、無益の費を省き、人馬にだに事を缺かずば宜しと心掛けしなり。

治世の武士は、上下共に身の飾、外見をもととし、家も奇麗にする故、似合ひたる器物を調へざるを得ず。妻子の衣服飲食に至るまで、皆善くする故に、知行所より取り納れたる物ばかりにては、なかなか足らざる故、借金買掛等を爲すに至る。亂世の武士は然らず。家も小屋掛けの如くし、雨だに漏らずば可とす。客を招き、振舞を爲すこともなければ、諸道具のほしき心もなし。自分及び妻子の衣も、皆綿服なり。

已れ軍陣に臨みては、鹽の搔き立て汁に黑米飯を喰ひ慣れ居る故に、世上安穩の時にも、料理食好みすることもなく、唯

善馬一匹、性根らしき若黨、槍持一人もほしと云ふ心のみにて、他に望なき故、知行所よりの收納物減少しても、さのみ困難せざりしなり。

徳川二代將軍秀忠公の時、松平新太郎、江戸に至りて謁見す。其の節、織田常眞が大踞をかき、上座にて碁を見物致し居られたる座敷にて、謁見仰せ付けらる。公曰はく「新太郎そこへはひりやれ。伯耆は雪國と聞き及びたるが、さうでおぢやるか。勝手へ行きて飯を喰やれ。大炊同道せよ」との上意にて、勝手にて料理をたべし時、上座は織田常眞、次は新太郎なり。御料理は蕪汁に、おろし大根の鱠、荒布の煮物、干魚の燒物なりき。是れ新太郎の物語なり。

余曾て萬治頃の借金證書を見し事あり。其の略に曰はく。

覺

一金何兩

右は拙者要用之儀有之借用致候何月何日迄に無相違御返濟可致候若し相違候はば衆人の中に於て御笑可被下候依て如件

右の如く、衆中にて一笑せらるる程、恥辱なることは無しと思ひ、決して違約することと無かりきとなり。其の廉恥心の篤き、以って觀るべきなり。

徳川氏の中世までは、人人武備の心掛極めて篤かりしなり。一人の武士あり、妻子もなく、獨居赤貧なり。或時、隣人、其の家の門戸を閉ぢて、音聲も聞こえざるを怪しみ、戸を排して入りて見しに、其の武士飢餓して死し居たり。依りて家内を搜索せしに、皆賣り盡くしたりと見え、唯一の鍋椀あるのみ。然るに、床上に一の甲冑櫃あり、開き見れば、美麗堅固な

る鎧兜あり。又其の内に軍用金と記せる一包あり、内に五十兩ありきと云ふ。すなはち、縱ひ餓死するに至るとも、武具、軍用金は決して使用せざりしなり。その志操の固き、以って見るべし。

右の數條を以っても、古人尙武の氣象、廉恥の志操の盛んなるを見るに足れり。今日に及びては、智育は日日に進めども、人人拜金主義に趨り、唯利是れ求め、國の元氣は衰頽して地を掃ふに至らんとす。豈嘆息痛哭せざるを得んや。青年諸子よ、諸子の心膽を鍊り、身體を健かにし、尙武の氣象を養成し、廉恥の志操を確守して、將來國家の重きに任ぜられんこと、余の希望に堪へざる所なり。國士

中川霞城

十七　寒稽古

大地は宇宙茫茫の間に在りてまた其の行道を一周し、明治某年とはいへ、起って書窓を推せば、殘雪垣根に堆く、堅氷地上を封じ、轉荒涼たる風光を認む。吾が輩茲に筆硯を洗ひ、新文壇に上り、まづ何事をか記すべき。此の風光を看來たれば、胸裏忽ち往時の經歷を憶ひ起こしぬ、即ち封建時代武士的少年の生活是れなり、寒稽古と稱し、幾多の少年が各自文武の講習に一身を委ねて苦心至らざる所なかりしこと、これなり。

讀者も既に知る如く、古來右文左武とは云ふものの、

封建時代の少年は主として武藝を講習し、弓馬劍槍砲術調練、實に是れ當時名譽の燒點にて、中んづく擊劍は殆ど學ばざる少年なく、從って當時最大の勢力を有せり。　されば、茲にまづ其の寒稽古に幾多の少年が相競うて場に上りし景況を物語るも、敢へて無益にあらざるべし。

尋常の日に於いては、大抵始業の時刻を朝五つ時とし、終業の時刻を九つとしたれども、寒稽古と稱するは、多くは曉天七つ時より始め五つ時に至って止むを古例とし、三十日乃至五十日の間氣候の最も酷寒

なる時期を以ってす。　既に其の期に近づきて何日より寒稽古なりとの掲示を見るや、少年は手を拍って相喜び、一日も缺席すまじと、自ら誓ひしは、蓋し他に故あるにあらず、當時人皆信じたり、寒稽古に出精すれば藝道は著しく上達するものなりと。　かかる名譽上の一大刺激あるよりして、彼れらは鋭意熱心ただ人後に落ちざらんことを是れ思ひ、父母も亦奬勵至らざるなかりしなり。　ここに於いて、彼れらは寢に就くにあたって稽古道具を取り揃へて之れを近く枕上に置き、父母に向かひて「城鼓四更」を報ぜば、

請ふ速かに呼び起こし給へ」と云ひ、晝の疲れに忽ち熟睡すと雖も、精神充滿すれば敢へて他人に呼び起こさるるを俟たず、時刻と思ふ頃には、獨り自ら眼の開くなり。

夢醒めてたまたま城頭に聞こゆる鼓聲を數ふれば、正に是れ八つ時なり。蹶起して衣服を着、破袴を穿ち、走りて裏口に出で、井華を汲まんと欲すれば、釣瓶の縄は堅く凍りて氷針滿つ。之れを握るに、指は忽ち墜つるここちして、覺えず手を呵すと雖も、汲み上げたる水は蒸發氣濛濛として立ち騰り、殆ど湯の如

し。掬して口を嗽ぎ面を洗へば、湯の如きもの、湯にあらず。既にして家に入れば、父母も亦夢を醒まし給ひ、寒威の骨に徹するを辭せず、何くれと世話し給ふはいと難有きことにぞある。

斯くて、兩刀を帶し、稽古道具を擔ひ、父母に告げて門を出づれば、或は寒月高く霜氣凛冽たる夜あり、或は北風怒號して、野狐の頻りに叫ぶ夜あり、或は冷霧四塞して、咫尺を辨せざる夜あり、或は積雪深くして道に迷ふ夜あり。或時は提灯忽ち消えて、路傍の樹影、高入道かと疑はれ、或時は履聲の反響、鬼ありて後へ

に來たるかと聞き做さる。或は詩を朗吟して勇を示し、或は聲を大いにして叱咤し、或は刀の欄に手を按じて睥睨するなど、若し傍に人ありて之れを觀たらんには、をかしきこと限りなかるべしと雖も、少年の常として、かかる瞬間には、種種耳にしたる怪異の譚を憶ひ起こし、自ら妄想を畫きて物凄く思ふなり。況して當時狐狸妖怪の事は社會の勢力ある迷信なりしをや。武家屋敷の常として彼所の森の中には老狐の窟あり、此所の橋の下には古狸の棲ありなど言ひ傳へしなり。されば、少年は此の如き夜行も膽

力練磨の修業とし、好んで狸橋、狐の森の畔を過ぎ、人に誇る談柄となしたり。亦甚だ愛すべき振舞と云ふべし。

既にして、師範家もしくは城中の擊劍場に到る。到りて見れば、朋友の既に我れに先だちて來たれるもあり、又未だ來たらざるもあり。中央に高く燈を釣り上げて場中を照らし、休憩所には二三の大火鉢あり、或は炭火を以ってし、或は焚火を以ってし、暖を取るに供せり。三三五五次第に出席の人數を加へ、皆火鉢の邊に群がりて、或は汗に濡れたる稽古襦袢を

乾かし、或は拳に貼する松脂膏藥を焙り、或は新竹刀を傳へて輕重を品するあり、古小手の使ひよくて棄て難きを說く者あり。斯くて、各自に衣を着替へ、用意整へば、少年は皆兄弟子の前に出で、一禮して起って試合を爲す。

やと呼びむと呼び、お面お小手の聲高く、竹刀相擊ちて憂憂火花を散らし、鎬を削り、朱胴の丸龍、黑胴の破軍星、金色と銀色と相映じ、面の紐の赤きあり、白きあり、若し幕府講武所の例を以って之れを說かば、白は是れ師範役に、赤は是れ教授方、白と紺との組紐は是

れ卽ち壯年血氣の世話心得にて、皆名譽多き勳章と謂ふも不可なし。幾番の試合、幾回の勝負、龍躍り、虎吼え、兩刀を振ふ宮本あれば、小太刀を執る牛若あり、或は大手をひろげてむづと組み伏するあり、或は足を搦まれつつ仰向きに倒るるあり。ほのぼのと夜の明くるころには、全身皆汗に染み、喉渴して雪を咬むあれば、聲を涸らして水を飲むあり、小手短く、臂破れて紅血を流すあれば、刀太く、胸を突かれて紫痕の鮮かなるあり。ここに至ってまた寒を覺えず、寒中尙團扇を揮ふ者あり。また快ならずや、壯ならずや。

彼の古スパルタの少年も、若し此の景況を觀るに於いては、愧死するならん。

擊劍場に於ける寒稽古の一斑は略此の如し。槍術、弓術に於けるも、亦相似たるもの多し。要するに、之れを今日明治の少年が深奥なる學藝を修め、幽玄なる眞理を講ずる精神的辛苦の多きに比すべからずと雖も、然れども、彼れら少年の氣力の雄壯快活なる、大いに今の少年に勝る者あるのみならず、長上を敬し、朋友に厚く、信義を重じ、廉耻の心深かりしは、時世の然らしむる所とはいへ、今日多く見る能はざる美風なりき。明治の少年たる者思はざる可からず。ニ

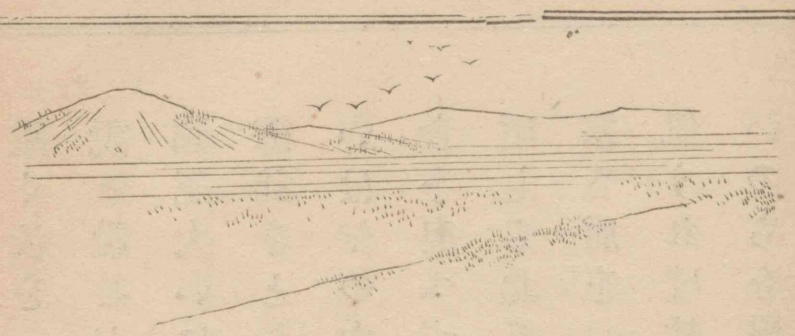
十八大家文鈔

十八　蘇武

坪内雄藏

風颯颯の　秋ふけて、
ふきひるがへす　旅ごろも、
おもき君命　いただきて、
遠く匈奴の　國に入る。
野邊の草木や、　鳥の聲、
聞く物の音も、　見る色も、

いづれかえびすの　ものならぬ。
思へば遠く　來つるかな。
流れ行く水　音たてて、
胸に愁への　波高し。
故郷母あり、　雁鳴きて、
老の寢覺や　いかならん。
よしや幾夜の　草枕、
旅寢の空に　果つるとも。
國家のために　盡くすべし。
君命重く、　身は輕し。



かうと覺悟は　定まりぬ。
使命、つぶさに　傳へつつ、
匈奴の王に　面接し、
蘇武は國書を　呈しけり。
もとより非道の　王なれば、
國書の旨意は　聽かざれど、
單身敵地に　使ひせし、
蘇武が勇氣を　惜しみつつ、
ある時蘇武を　召しよせて、
「降り仕へよ、　しかあらば、

重く汝を
説き諭せども、
國王大いに
蘇武をとらへて
いはやの中に
食を與へず
頃しも北風
寒さ膚を
飢うれば枯草を
いのちを繋ぐ

用ひん」と、
聽かざれば、
怒をなし、
荒山の
幽閉し、
苦しめぬ。
雪を吹き、
つんざけり。
雪に和し、
料となす。

日數經れども
えびすら怪しみ、
このたびは、蘇武を
羊のむれをば
「雄羊孕む
放免せん」と
覺悟はしても
ぬむられぬ夜も
一夜雲なく
秋も最中の

死せざれば、
かつ怖れ、
野に移し、
まもらせて、
ことあらば、
あざけりぬ。
無念さに、
幾たびか。
月すみて、
空の色。

せめてはかくて
雁に托せし
かくて春去り、
又秋の風、
落葉落葉の
十有九年
老いて屈せぬ
天助けてか
雁の使の
樂しきたよりぞ

あることをと、
筆の跡。
夏來たり、
冬の霜、
重なりて、
夢の間や。
忠節を、
不思議にも、
かひありて、
聞こえける。

國と國との
蘇武は赦され
立ちいでし時の
いつしか雪とぞ
なれりける。國語讀本

○　ベンニーとブラサム

亞米利加合衆國の首府ウォシントンから五十里許も離れて居る片田舎の農家の子が兵役に出て間もなく、哨兵の勤務中に居眠りをしたといふので、銃殺の刑に處せられることとなつた。その噂が郷里の方へ聞こえた時の父の驚き、取りわけ妹のブラサムの驚きはどんなであつたらう。父は殆どまこととは思はぬ。「悴に限つて、さやうな不都合

和議成りて、
歸りしが、
黑髪は、

のあらう筈はない、何かの間違だらう」と人にも話し、獨語にも言った。ブラサムもやはりさう思っては居るものの、どうも氣になってたまらなかった。

そのうちに、表に「郵便」といふ聲がして、一封の手紙が投げ込まれた。ブラサムは拾ふより早く「や、兄樣から」。「なに、悴から」と父は受け取ったが、手が顫へて封が切れぬ。やうやう讀みつづけるその文言は、

此の手紙、父上の御手許に屆き候頃には、私ははや此の世になきものと思召し下されたく候、戰場にて花花しき働をなし、國家の爲に斃るることは、豫て覺悟致し居り候ひしが、職務怠慢の罪を獲て刑せられ、父上に先だち候はんこと、殘念の至極に御座候。但し此の度の事は決して

破廉恥又は不忠實の結果には候はず、申しわけまでに左に書き記し候間、御讀み取り下され、先だち候不孝の段は御宥し下されたく候。

御承知あらせられ候通り、入營の際、ゼンミー君の母上より、くれぐれ同君の保護を賴まれ候故、始終其の心掛けにて罷り在り候處、同君は甚だ虛弱につき、その病氣の都度、私は內內代勤致し、力の限り介抱致し居りし事に御座候。

さて當日は連日の行軍に引き續きて、午後は駈足行進を行ふことと相成り、强壯の者すら大いに疲勞致し候程ゆゑ、ゼンミー君の如きは、陣地に到着致し候後は、殆ど正體もなく相成り候ひき。然るに、その夜の哨兵は不幸にもゼンミー君に當たり、見るに堪へかね候まま、私代はって

勤務致し候處、その時の疲勞、假令目のさきに銃口を向けらるとも、こらへがたしと思はるる程にて、夜更くるままに我れ知らず打ち倒れ、驚き覺めしときは早既に軍法の罪人にて候ひき。

讀みさして、父と妹とは互に目と目を見合はせた。

かくて、死刑の宣告を受け候が、聯隊長より特別の慈悲にて、此の手紙を認むる間の猶豫を與へられ候。決して聯隊長を御怨みあるまじく候、軍法は枉げ難く候。必ずゼンミー君を御怨みあるまじく候、ゼンミー君は自ら訴へ出でて私の死に代はらんと申され候。されど、左樣の事は許さるる筈もなく、第一私が謝絶致し候。父上、ブラサムの事を思へば、腸もちぎるる樣に候へども、聊かも卑怯の振舞して刑せらるるわけには候はぬことゆゑ、先だつ不孝の段は何とぞ御宥し下されたく候。まだ申し上げたき事數數候へど、時迫り候まま、これにて筆をとめ候。

父も妹もしばしは唯涙を拭ふのみであった。

その晩の十一時過ぎでもあったらうか、この家の裏口の戸が明いて、小さい人の影がぬけ出した。影の主は疑もなくブラサムである。ブラサムは兄の命を救ふには、大統領にぢきぢき歎願をするより外に手段はないと考へた。さうなると、この事を父に相談する間も心がせく、兄の死は目前に迫って居る。そこで、ブラサムは父にも知らせず、唯一人家をぬけ出し、小徑を傳ひ、水車小屋に沿うて大道へ出、一散に停車場へ駈け附けた。をりしも北の方から來合はせた

終列車のとまるを待ちかねて、それに乘り込んだ。

車掌が怪しんで仔細を聞けば「兄の命が助けたさに、ウォシントンまで、大統領を尋ねて參るもの。どうぞ、御慈悲に、面會の手續を敎へて下さい」といふ。車掌もそのけなげなことに感じて、懇に敎へ慰め、翌朝、汽車が著くや否や、すぐ人を賴んで、ブラサムを大統領の官舍まで送らせてやった。

兄の命はもう三時間とはないのである。今は一刻も猶豫はならぬ、ブラサムはいきなり官房にはひった。

時の大統領リンコーンは正義の友、人道の身方として名高い人である。時しも南北戰爭の最中で、其の日も早朝から國務を執って居ると、つとはひって來て、恭しく一禮するものがある。見れば、見も知らぬ一少女であった。リンコーンは「何ぞ用かな」と物和かに問うた。「どうぞ、ベンニーを御助け下さいませ」。「ベンニー。ベンニーとは誰れぢゃ」。「私の兄さんでございます。哨兵で居眠りしました爲、ついもうぢきに殺されます」。リンコーンは机の上の書類を繰り返して見て「むう、分かった、分かった。願の次第は分かったが、しかし哨兵勤務中に睡るとは不埒なことぢゃ。軍法は是非に及ばぬ、あきらめねばなるまいぞよ」と懇に諭したが、少女はなほも言葉をつぎ「それは承知致して居りますなれど、その晩、兄はひどく疲れて居りまして、ゼンミーさんが弱いものですから、いつも二人前働きますから、そして兄の番ではなかったのですから」と何もかも一緒に云って、自分ながらどう云ってよいのやら分からなくなって、思はずわっ

と泣き出した。「よし、よし。まあここへ腰を掛けな。泣いて居ては、言ふことがよく分からぬ。落ち附いて御話し」と優しく云はれて、少女はつぎたしつぎたし前後の仔細を一通り話して、兄の手紙を大統領に示した。

リンコーンは手紙を讀み終はり、やがて數行の公文を認めて呼鈴を鳴らし「すぐ、この書面を聯隊へ送る樣に」と役人に渡し、さて少女の方に向き直って云った「ブラサムや、兄さんは助けてやるから、安心してうちへ御歸り、そしておとうさんにさういっておくれ『戰友の爲に誠を盡くし、殺さるる際になっても、ちっともわるびれぬ魂は亞米利加人の手本ぢゃ。リンコーンはさういふ勇士を殺しはせぬ。助けた』と、さういっておくれ」。少女の喜はどんなであったらうか、それを聞いた父の喜は又どんなであったらうか。國語讀本

十九　無名の仁者

細川潤次郎

秋田縣の豪農何某といふものの祖先は慈善の人にて施與をこのみたるが、一人の力、一時の施は及ぶところ限あることなれば、いつまでも多くの人を濟はんと思ひ、自身、主となりて社倉の如きものを設け、有志の人人を募りて、年年に穀を積みて凶年の備となしたりしが、子孫も其の遺法を守り、石數は次第次第に增加して、如何なる飢饉に出逢ふとも、此の村村は

菜色なかるべきやうになりぬ。

かかる奇特の行ある者には、藍綬章といふものを賜ひて表章する例なれば、此の人の事につけても、其の筋に於いて褒賞の評議ありけるを、何某は其の由を洩れ聞きて、いと安からぬことに思ひ、内内其の筋へ歎願して此の賞典に與からぬこととなれり。

其の故如何にと問ふに、「祖先の戒に、『人の善事をなすは誠の心より出づべきものなり。若し名を貪るなどの心ありてなしたる善事は善事にあらず』といへりしを、代代家訓と心得て社倉の穀を積むと齊しく

陰徳を積まんとの心懸なるに、今更藍綬章を賜はりて之れを佩用し、其の名を世上に吹聽するが如くなる時は、祖先の遺訓に違ひ、是れまでなしたる善事は却って悪事ともなるべしと思ふにより、かく内願に及びたるなり」といへり。

余は其の筋の人より此の事を聞き、感嘆の餘り記し置きて世の人の勸めにせんと思へども、此の人の氏名を記し置く時は、是れとても名の世に傳はるべきことなれば、此の人の知りたらんには、是れも家訓に違へることなりとて、迷惑に思はんことを恐れて、此

の人の氏名をば殊更に洩らしつ。名なし草

二十　越路の春雪

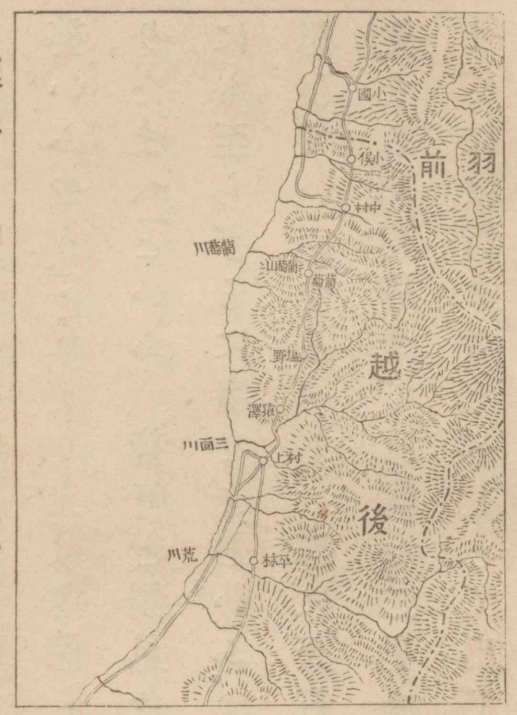
橘南谿

天明丙午三月十八日、早朝少し雪降る。越後の國平林といふ處を立ち出で、二里餘り行きて村上の城下に至る。ここの問屋にて馬を借らんと云ふに「これよりさきは雪深くして、馬の足立ちがたし」とて出ださず。三月末なれば、いかに雪國なればとて、馬の足の立ちがたき程にはあるまじといひながら、せん方なくて歩み行くに、村上より一里、猿澤驛の邊、雪既に

多し。

それより又一里、鹽町といふ驛にて晝食す。家の老婆いふやう「これより先は雪深し。今宵はここに宿りたまへ」といふ。養軒と顔見合はせて「いまだ日中にも至らざるに宿せよといふ。此の家にとめんと思ひていふなるべし。殊に天氣も晴れたり。此の先なる葡萄驛までは、纔か二里なれば、八つ過ぐる頃までには、行きつくべし」とて出でたるに、誠に老婆の云へるが如く、鹽町の出はなれより雪殊に深く、山川道路、只、一面の白雪にて、村より半道ばかりは人の行

き通ひし跡もありしが、それより先は道筋もわからず、方角をも取り失ひて迷ひゆきけり。



折折は雪を踏み拔きて、川の中に落ち入り、或は斷岸などの處にゆきかかり、雪崩れ落ちて深き處へ倒れ込みなどし、養軒と助けあひつつ、谷筋の平なる所を道なるべしと志して行くほどに、谷川、池澤、深田などに落ち入りこけ倒るること數十度に及べり。されど、積雪至って深ければ川の上にても身體全くおち入ることなし。かく千辛萬苦して、僅かに二里の路に半日かかり、日暮に至りて、葡萄驛にたどりつきたり。

誠に老婆の言葉に從ひ、鹽町に一宿し、早朝雪の堅きうちに案内者をやとひて來たらば、かかる危きことには逢ふまじかりしをと後悔しながら、まづ恙なく着きしを悅び、湯をつかひ爐にあたりて寒氣を防ぐに、足より血の流るるに驚き思へば、今日度度踏みぬき落ち入りしとき疵つきたりしが、その節は血も

凍りてはしらず、痛をも覺えざりしが、今湯に入り火にあたためて、初めて血の出てけるなり。その疵の痕、今に黑く殘れり。さて、この夜つくづく思ふに「今日の處だにかくの如し。明日の道は世にきこえたる葡萄峠にて、北地第一の雪所なれば、如何なる難儀にか及ばん。只、早天、雪凍りて堅き間に案内者をやとひて越すべし」とて用意せり。

翌日、まだ明け果てぬ頃より立ち出でて、案内を先に立てて道を急ぐ。誠に聞きしにまさりて、數丈の積雪、山は白銀の如くにして、樹木も見えず。されど、今

日は案内あれば、道もたどたどしからず。雪も凍りて落ちいる恐もなくして、程なく頂に至れり。此の處に矢伏明神の祠あり。祠後に巖穴あり、明神の住み給ふ處なりといふ。この巖穴の上の方に甚だ高き絶壁あり、高さ三十丈餘ありと云ふ。老杉の梢、岩の半ばに及びて、畫を見るが如く、奇絶なること比類なし。

雪は一しきりづつふり來たり、寒氣誠に甚だし。それより中村、小俣等の村村を過ぎけるに、雪もやみ空も晴れ、天氣殊に長閑になりたれど、積もれる雪はい

よいよ深く、數丈に餘れり。晝過ぐる頃より、雪は下解けしにけん處處ふみ拔きて、落ち入ること昨日の如し。

さて小國（オグニ）といふ處の前にて、大なる峠を登りつめて下る所あり。甚だ嶮岨（けわしい）にして下るべき道なし。案内の者もいづれへ下らんとためらふ内、雪にすべりて遙かなる谷底へ落ちぬ。余は此の體を見て、案内の人の歩みやうこそあしけれ、一足づつ足を踏みつけて靜かに下らば何事かあらんと云ひつつ、進まんとせしに、早そのままずべり落ちて、中空を飛ぶが如く

夢ごこちに一町ばかりも轉び落ちたりしに、雪に埋み殘れる木の梢に落ちかかりて留まりたり。

手足腰などうちたれど、痛を覺えず。やうやう、その梢をぬけ出でたれど、下は數百仞の谷にて、下らんやうなく、又これまで落ちたれば、登らん事は尙更なり、いかにせんと思ふほどに、力草に持てる木の梢の、手先や少し弛（たル）みにけん、又雪の上を滑り落つるに、中程よりは首の方逆樣になりて落ちて行く。先に余が梢にかかれる間に、養軒は、早先におち下りたれば、その上へ落ち重なりたり。されど幸にけがなかりき。」

此の處、少し足留まりありければ、養軒と手を取りあひて、上の方を仰ぎみるに、雪の山、頭上に覆ひかかれり。今にもそのなだれの落ちこば、命を失はんかと恐ろしさに、息もつぎあへざりしを、又眞逆様にすべり落ちて、千仞の谷底まで、ただ夢の如くに落ちつきたり。

谷底にては、いよいよ上の山、おちかかるやうに覺ゆれば、ただなだれの恐ろしく、何とぞ一足も早く遁れんと走り行くに、谷の底には足の下に雪を隔てて、岩波の音駭しくきこゆ。雪を踏み拔き、谷川に落ち入

らん事も恐ろしけれど、それよりもただ上よりなだれの落ち來たらん事の危ければ、前後を顧みず三人ともにばらばらになり、只走りに走ること十町餘にして、やうやう廣みに出づ。まづ、命を拾へる心地して、暫く休らひ、互に恙なかりし事を悦びぬ。それより、程なく小國に着きて宿を借る。さて、落ちつきて後、四人互に顏を見れば、その色土の如く、動悸いまだ鎭まらず。誠に今日の危さは、筆にも言にも盡くすべきにもあらず。命を保てるは天助ともいふべし。」

總じて雪國にはなだれといふことあり、又あわとい

ふことありて、年年人の損ずること、となり。あわは冬多し、なだれは三四月の頃にあり。あわといふは雪の盛りに降る時、山上の木の梢より雪泡一つ落つる時、その泡段段轉び落つるに從ひ、雪ころがしをする如く次第に大きくなり、麓に至るころは大山の如くになりて落ち下る。これにあたるものは、大木も根こぎになり、折あしく通りかかる時は人馬ともによけ避くるに遑あらず、微塵に打ち碎かるる事なり。」なだれは春の末地中より湯氣出づるに從ひ、數丈積もりたる雪の下よりゆるみ附きて、山上よりなだれ

落つるに、その勢に動かされて、その邊の雪一同に崩れ落ちて、川も谷も埋むことなり。人馬の響にてもなだれおつることとなり。これに打たるる者は即死するのみならず、數十丈の雪に埋もれて、雪消え盡くるまでは知る人もなし。この二つは北地の人の恐るる事なり。日頃は只なほざりに聞き居たりしが、今日の氣遣思ひ出だすも肝冷ゆるここちす。抑この葡萄峠は羽越の界にて、雪中のみならず、四時ともに旅人の難儀する處なりとぞ。東遊記

二十一　盲啞學校

坪内雄藏

久しく臺灣へ出稼してゐたある大工の娘に、今年やうやう十一になるお德といふ少女があった。生來の啞ゆゑ教育もせずに棄てておけば、一生廢人となり果つべきであったを、出入先のある陸軍少將の夫人が不便がって、大工の留守中に盲啞學校へ入れて、教育を受けさせた。

かたはの子ほど一しほ不便に思ふは親心の常、父の大工は、海山千里を隔てた臺灣にゐる間、夜に晝に、娘のことを思ひ出さぬことはなかった。然るに、今度

様子あって、一應本土へたち歸ったので、草鞋がけのままづ恩人の少將を尋ね、その足ですぐ盲啞學校へいった。大工は、盲啞學校とはどうした學校か、無學ゆゑ委しくは知らぬのであった。

學校は丁度、休憩時間で、玄關前には男女の生徒が集まって遊んで居たが、盲生の外は、一人も口をきくものがない、どれもどれも、手眞似ばかり、笑ふばかり、うなづくばかり。　ああ、この子たちも皆、お德同樣のかたはかと、大工は思はず涙をもよほした。

さて、受付に來意を通ずると、やがて、書記らしい人が

出て來て、應接所に案内し「しばらくお待ちください」といって出ていった。程なく洋服を著けた教師がお德を連れてはひって來て、會釋して椅子についた。お德は洗濯物ながらさっぱりした物を著て、見違へるほどに成長してゐた。

大工は嬉しさに胸が一ぱいになって、お德の顔を見つめたまま、物もいはれない。やっとのことで、教師に向かって「何の因果でこんなかたはに生まれましたか。久しぶりに遇った父に、たった一言も物がいへぬとは」といひさして聲を曇らせた。教師は不審

さうに「では、お前さんはこの子が物をいふ樣になったことを御存じないか」といふ。「御冗談おっしゃってはいけませぬ。唖が物をいふ筈はありませぬ」と、大工は目を見張った。「いやいや、それが教育の力」といひながら、教師はお德に向かひ、徐かに「この方はどなた。答へてごらん」と命じた。思ひがけなや、お德は口を開いて「私のおとう樣です」と答へた。

聲の調子は安らかではなかったけれど、ともかくも、明かにいったには相違ない。父の大工は、びっくりして、もしや、外の子がどこかにゐていったのではな

いかと疑って、思はずあちこちを見まはした。

啞が手眞似で意を通ずるのは、見もし、聞きもしたが、物をいふのを聞いたは、今が初めてゆゑ、父の大工は非常に驚いた。

少將の夫人のなさけで、留主中に、お德がこの學校へ入れられ、養育をうけてゐることは知ってゐたが、衣食をさせて貰ふだけとのみ思ってゐたゆゑ、物をいふやうになったとは、夢にも思ひ設けなかった。教師の說明で、盲啞學校の趣意がだんだんわかるにつれて、大工は驚き喜んで、躍りあがる程であった。

まだ、口では複雜なことはいへぬど、筆談ならどんな事でも話し、算術、國語、圖畫、手工、裁縫等も習ひ覺え、あまつさへ開校以來の優等生と聞いて、父は嬉し泣きに泣き出した。

教師はなほ十分に會得させるために、大工を案內して教場の樣子を見せた。

階下は啞生の教室で、二階は盲生の教室である。盲生は、點字盤といふもので文字を習ふ。盲生は啞生と違って、耳が働くゆゑ、音樂をも修め、又鍼治、按摩などの技藝をも習ふ。國語、算術その他種種の學科が

ある、體操もある。

唖生の一年生を教ふるのは、女教師である。耳と口とこそ用をなさないが、唖生は目が見えるゆゑ、盲人よりもわんぱくで、喧嘩をする、ふざける、始末にゆかぬ。されど、教師は、氣長に教訓し、教授する、實に老練なものである。

まづ、發音を教へるには、黑板の側に鏡があって生徒を一人づつそこに立たせて、教師自身の口の動き工合を示して、同樣に口を動かし、音を出させるのが始まり。教師は骨の折れることであらうが、その勞苦は無駄にはならぬ。現に昨年の卒業式にも、唖生が立派な演說をしたといふ。

大工はこれを見て、「お德もまたかうして教育をうけたのか」と感心し、校長にも面會して禮を述べ、せめてのの感謝のしるしにと、自分が稼ぎ溜めた貯金の幾分かを學校に寄附して歸ったとのこと。國語讀本

二十二　公子の躾方を申し遣はす文

徳川齊昭

餘寒の處、其の地子供ら、緑の間にも障りなきは一段

の事に候。　去る二十七日、餘四麿事、下町神勢館へ行き候由、これよりは歩行又は乘馬にて度度行き候が宜しく候。　朝も未明より起き、水にて顔を洗ひ、薄着にて庭などへ出て、子供相應いたづら致し候が宜しく候。　風を引き申すべしなどとて、用心致させ候は以っての外に候。　とかく、武士の子は手づよく（やうゝ）手あらに成長致し申さず候うては、追ひ追ひ成長の上、公家や町人出家の様に成り行き、天下の御爲を致し候様に相成らざるゆゑ、何分にも手づよく、からだを幼年より鍛へて育て候様に致したく候。　さて、文武共に出精致させ候が宜しく候。　文武を勵ませ、それにて死に候ほどの子は惜しからず候へば、死に候うても苦しからず候。　他へ養子に遣はし候うても、柔弱にて文武これなき者にては、水戸家の外聞宜しからず。　死に候は、誰れにても一度は死に候者故、外聞宜

德川齊昭書（流芳遺墨）

しからざる子供が成長致し候位に候はば、死に候方はるかに勝り候故、表の附きの者並びに伊勢等へも申し聞け候うて、前文の通り、手あらく仕立て候うて、文武を勵ませ申すべく候。奥にても、附きの者に申し聞け候うて、讀書のさらへ等をよくよく致させ申すべく候。書は文武稽古の間は前文に申すごとく、神勢館又は好文亭等へ歩行致し候が宜し、又相手などと竹刀打致し候が宜し。子供の大人の如く致し居り候は身のこなれ悪しく、宜しからず候。如才はこれあるまじく候へども、序にまかせ申し遣はし候。

牛乳は人乳をやめ候ほどの子供は誰れが用ひ候うても宜し、毎朝取り立ての乳を呑ませ申すべく候。一人にて五勺か一合も呑み候はば足り申すべく候。これは松延、本間等へ申し談じ候が宜し。一橋よりも、今以って日日取りに來たり、一二合ばかりづつ遣はし申し候。何よりも牛乳に越し候藥はこれなしと存じ候なり。

なほなほ、餘四麿始め、毎朝の水は只今にてもあび候事と存じ候。若し浴び申さず候はば、浴ぶせ申すべく候。さるかはり、湯はつかはせ申すまじく

候。

○自警

徳川齊昭

飯を得るごとに兵粮の粗粗しきを思ひ、衣を製するに甲冑の窮屈を思ひ、居宅を構ふるに陣中の不自由を思ひ、起居の安きに山野の苦しみを思ひ、父母妻子同席し兄弟親戚と交はるに遠國離居の時の悲歎を思ひやりて、今日の無事安穩を大事とせば、何ぞ奢を生ぜん。

六月

師範學校國文教科書卷二終

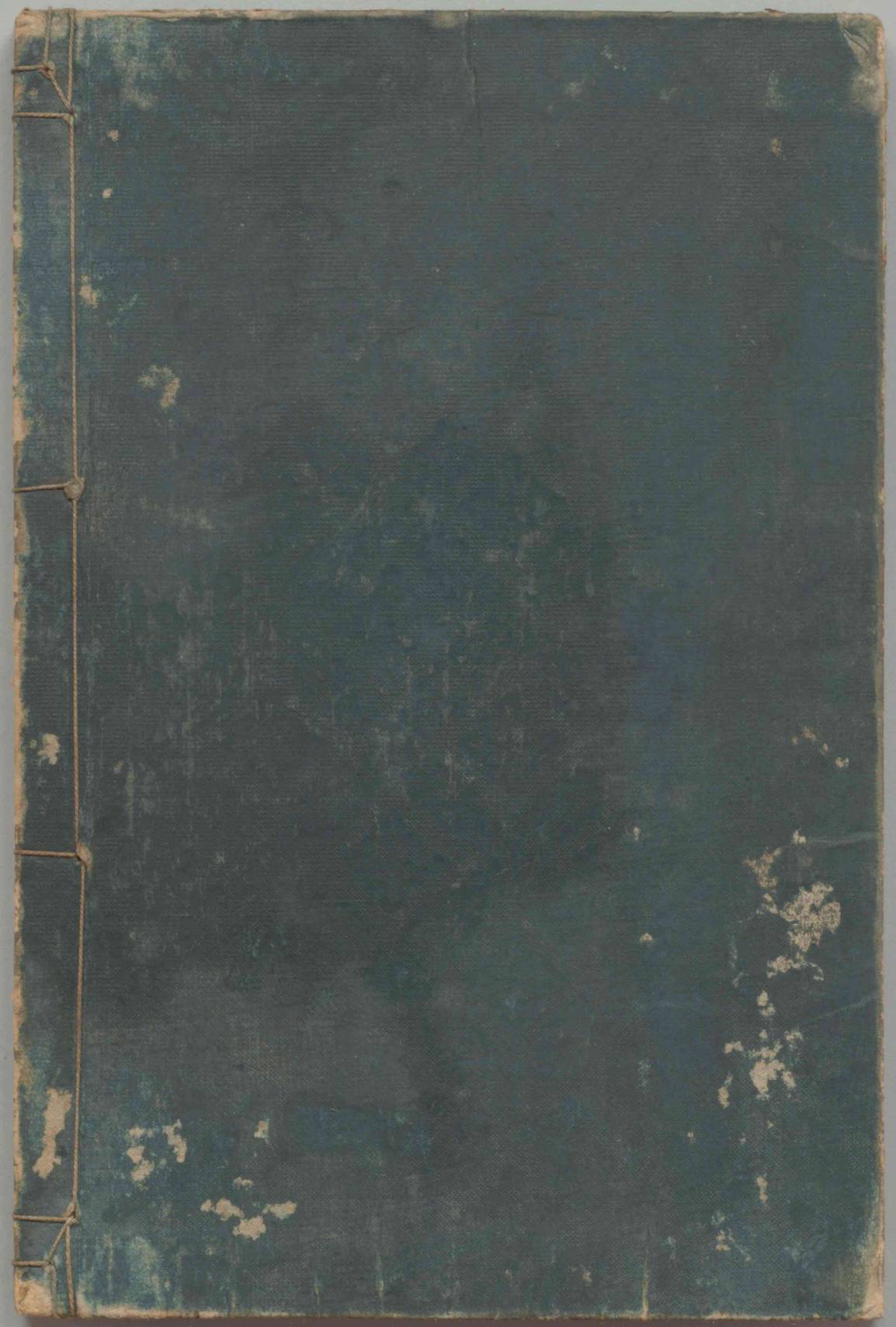
文部省檢定濟
明治三十七年三月二日　師範學校國語科教科書

明治三十六年十二月五日印刷
明治三十六年十二月八日發行
明治三十七年二月廿六日再版印刷
明治三十七年二月廿九日訂正再版發行
明治三十七年十月七日訂正三版印刷
明治三十七年十月十八日訂正四版發行
明治三十八年一月十一日訂正四版印刷
明治三十八年一月廿五日訂正四版發行
明治三十八年三月廿八日訂正五版印刷
明治三十八年十一月廿二日訂正五版發行
明治三十九年二月廿三日訂正六版印刷
明治三十九年二月廿三日訂正六版發行

明治三十九年二月二日訂正七版印刷
明治三十九年四月五日訂正七版發行
明治三十九年十月十七日訂正八版印刷
明治三十九年十月十八日訂正八版發行
明治三十九年十二月十六日訂正九版印刷
明治四十年二月十九日訂正九版發行
明治四十年二月廿四日訂正十版印刷
明治四十一年二月十一日訂正十版發行
明治四十一年二月十四日訂正十一版印刷
明治四十一年二月十七日訂正十一版發行
明治四十一年二月二十日訂正十二版發行

師範學校國文教科書卷二
正價金貳拾八錢

編纂者　吉田彌平
發行者　東京市神田區裏神保町六番地　上原才一郎
發行所　東京市神田區裏神保町六番地　光風館書店（振替貯金口座三二七番）（電話本局二千三十九番）
印刷者　東京市神田區裏神保町六番地　矢島一三

著作權所有

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は發行所へ直接御注文被下候はば直に御送本可仕候